女子國文新編

四年制　巻四

42117

教科書文庫

4

810

42-1941

200030
2281

教科書文庫
4
810
42-1941
2000302281

文部省檢定濟
昭和十六年九月四日　高等女學校國語科教科書

女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授
垣内松三編

資料室
375-9
Ka9

一　國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

廣島大學圖書印

廣島大学 教 41404 図書

広島大学図書
2000302281

目次（巻四）

一 明治神宮……溝口白羊……四
二 我が國民性……芳賀矢一……一八
三 手巾……芥川龍之介……一三
四 御製謹講……千葉胤明……二七
五 近世歌人抄……賀茂眞淵―加藤千蔭―村田春海―小澤蘆庵―香川景樹―良寛―井手曙覽―大隈言道……四四
六 武藏野……國木田獨歩……四九
七 板倉勝重……新井白石……五九
八 岡に立つて……長塚節……六三
九 野村望東尼……菊池寛……七二
一〇 東遊記抄……橘南谿……九〇
一一 パナマとスエズ……山崎直方……九八
一二 線の上……吉江喬松……一〇七
一三 太平洋時代……田中寛一……一〇九
一四 冬の日記……戸川秋骨……一一四
一五 人工の翼……島崎藤村……一二三
一六 妹に……吉田松陰……一二六
一七 大海の日の出……德富健次郎……一三三
一八 五百羅漢の畫幅……藤岡作太郎……一三六
一九 滿蒙の四季……上田恭輔……一四〇
二〇 誠の說……三浦梅園……一五二
二一 夜叉王……岡本綺堂……一五七
二二 國民的理想……大西祝……一六九
附錄 漢字異同辨

一明治神宮

濱口白羊

快美な色彩の反射と、柔かい感觸とをもつ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そしてどこからともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度そこを通つたことだらう。森の中からは、時として石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。或時は六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々と森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ！　さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、強い懷かしさで充溢された。

濱口白羊　名は駒造。文學者。明治十四年生。

＊感觸　「秋の陽光に包まれてゐる代々木の森」

代々木　東京市澁谷區代々木。十ケ町より成る。

＊金屬的の響

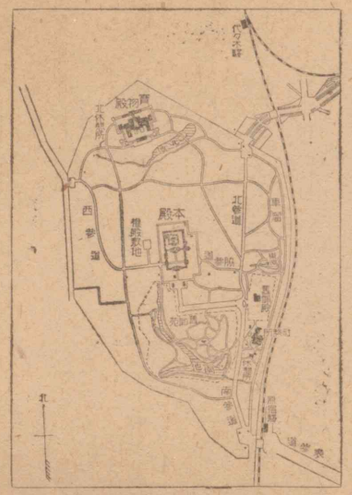
＊獻木

＊曳々

「あの中に明治神宮が建つのだ」

＊衝動

そして毎日のやうにそこを通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つていくのが、たまらないほど嬉しく思はれた。



明治神宮內苑略圖

その明治神宮がとうとう竣工した。嘗て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも列んで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長くつゞき、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にやら、すつかり見

＊工程

「その明治神宮がとうとう竣工した」

＊竣工

「常綠の森」

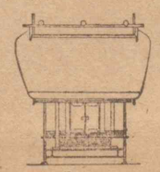
＊御料地

違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃の趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂ゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、なんともいへない神々しい感じを起させる。

神域よ。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土よ。私は始めて完成した明治神宮の神苑に立つた時、その改つた光景を見て、今更のやうに强烈な感激に打たれた。何者の力がこの新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隱れ

* 幽邃 * 鬱蒼

流造 神社建築の一種。側面を妻風造とし、棟より前の軒先までよりも長くして、向拜（參詣人が拜禮する所）をも併せ覆ふやうにつくつたもの。流破風造。



「神域」「何者の力」

造營局 明治神宮造營局。大正四年四月三十日、勅令によつて設置。伏見宮貞愛親王殿下が

た部面に動いた强い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固きに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿德と、そしてこの二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純な感謝の念と、この三つのものが陰に陽に工程を捗らせて、遂にこの記念すべき大工事を完成するに至らしめたことは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實であるといはねばならぬ。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た全國青年團員の造營奉仕、數百里の遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木、これらは何事を語つてゐるか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かくして全國民の誠

總裁であらせられた。

「數字を高く超越して」

尺〆 木材の體積を計る單位。普通切口一尺角（〇・三〇三平方米）、長さ二間（一・八一八米）の木材を尺〆一本といふ。地方によつて多少の差異がある。

明治天皇 御名は睦仁。明治四十五年崩御、御壽六十一。

昭憲皇太后 明治天皇皇后。御名は美子。大正三年崩御、御壽六十五。

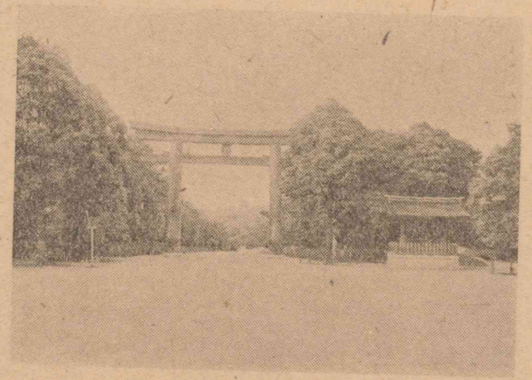
* 御懿德

* 對へ

「これらは何事を語つてゐるか」

意の結晶たるこの宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇並に昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。今までの神社に曾て見たことのない明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。

私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして一歩々々美しい小砂利の上を神殿に近く踏入るに隨つて、いよ〳〵肅然たる心持になつて、深く襟を掻合はせた。



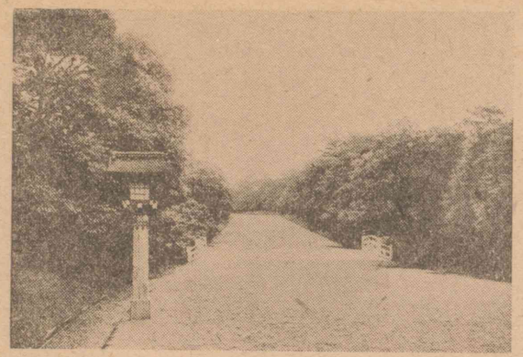
南參道入口

*標的

表參道　參拜路に南、北、西の三筋がある。南參道を正參道とし之を表參道といふ。原宿驛の南方、水無橋附近から始まる。北參道は千駄ケ谷方面より、西參道は山谷口とする。

*直感

參道の兩側には、盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を模した風致のいゝ細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。こゝは神苑中で唯一の人工を加へたと



御神橋

萬成　岡山市。花崗岩の名産地。

*勾欄

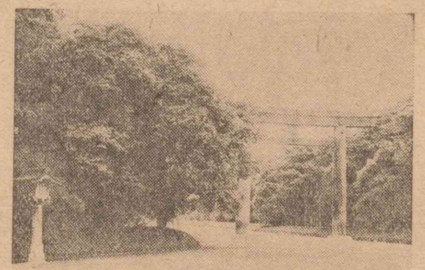
筑波山　茨城縣筑波・眞壁・新治三郡に跨がる名山。

紅於　杜牧の詩に、「遠ク寒山ニ上レバ石徑斜ナリ。白雲生ズル處人家有リ。車ヲ停メテ坐ロニ愛ス楓林ノ晚。霜葉ハ二月ノ花ヨリモ紅ナリ。」

ころで、神苑の殆ど總べてが纎細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木の斷えたところに、千七百四十といふ驚くべき樹齢を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣産の檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、その高さは三丈九尺に達するとのことだ。

この鳥居の在る處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄ケ谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、こゝから左折すれば、道は



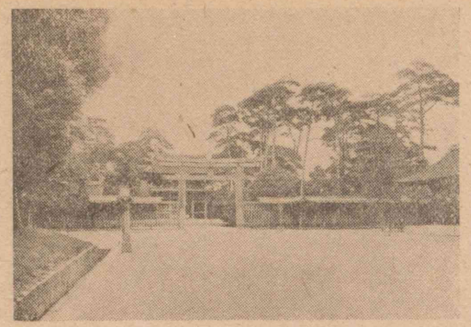
大鳥居

*纎細

明神鳥居　柱は傾斜し、笠木も島木も共に反りかへつて島木と貫の間に額束（ヌカヅカ）があり、貫が柱にはまる所に楔がある。

「こゝから左折すれば」

更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、眼界はぱつと廣く且明かるくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。



御社殿正面

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてゐる。

近く拜殿に登つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも神の新しい宮居らしい

土佐繪　土佐權守春日經隆のはじめた繪畫の一派。

*檜皮葺

木曾　長野縣西筑摩郡に屬する。木曾川沿岸の山谷に亘り御料林がある。

一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して、奥は卽ち神靈のおはします內々院で、衆庶の濫りに窺ふことを許されない神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさ
に涙こぼるゝ

私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。

まあ、何といふ明かるい、快い感じをもつた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、併し陰鬱な感じを漂はせてゐる中に、この神宮ばかりは隱すところのない心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを暴露して見せてゐる。しかもそれでゐて、決して淺薄な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、

*衆庶

何事の……西行法師が伊勢の神宮に詣うでた時の感詠として有名なもの。

「明かるい、快い感じをもつた社殿」

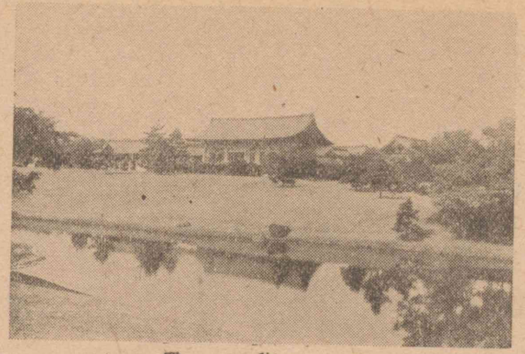
譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな强い威力が迫り寄るのを覺える。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸收しようとお努め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の濶達な御氣象に對して、その明かるいお宮の感じが、いかにもぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれた。

御本殿と中門

「これでこそ」

*御氣象

拜殿を中心にして、左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そしてその奥に續いて便殿の遠く望まれる心持、それらの總べてが、又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。



寶物殿

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亙る森林帶があつて、その向うの廣く開けた明かるい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に綠の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が、そこに見える。こゝらに來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶び、樹

「均齊を保ちながら」

＊廻廊

＊便殿

「嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉」

林を組成する色々の樹類の中に落葉樹の交つてゐるのが、少なからず目に着く。寶物殿へいくまでの道にはずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。

寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十六坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて、若々しい楓の樹が美しく植ゑ列ねられてゐる。

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。この邊り、左右兩側にある古雅な木柵を繞らした一構へは、卽ち明治天皇・昭憲皇太后の深

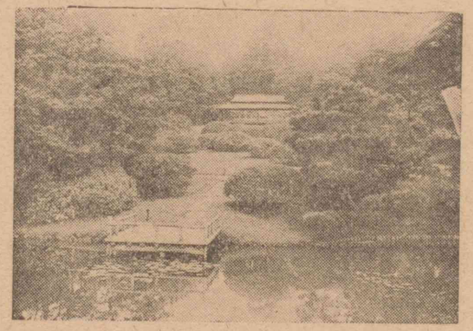
中古時代　平安朝時代。

八幡製鐵所　日本製鐵株式會社八幡製鐵所。福岡縣八幡市にある東洋一の製鐵工場。

＊池塘

＊枡形

い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ舊御茶屋といひ、いづれも御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝで、殊さら技巧を弄しないところに、何ともいへない優雅な趣致がある。この御苑は明治天皇・昭憲皇太后の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處で、高く聳えてゐる松を背景にした芝生の上に、點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。



舊御苑

＊野趣

私は此等を一わたり拝見して廻つて、涙ぐましいほどの強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると、御殿のあたりは、すつかりもう深い靄に包まれて、黒々と畫でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切開いたやうに、路線の白い色が暮殘つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄つけられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる、森嚴な幽邃な優雅な神苑よ。永い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。

（明治神宮記）

「路線の白い色が暮殘つて續いて見える」

二 我が國民性

芳賀矢一

我が日本國は、氣候は溫和である。山川は秀麗である。花・紅葉、四季折々の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは當然である。四圍の風光の凡てが笑つてゐる中に、ひとり住民だけが笑はずにはゐられぬ。現世の生活を樂しむ國民が、天地・山川を愛し、自然に憧れるのも當然である。この點に於て、我々は實に天の福德を得てゐるといつてよい。殊に日本人が花鳥風月に樂しむことは、吾人の生活の各方面に於てでも見られるのである。

上代に於ける衣食住は、多くは我が國土に繁茂してゐた植物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤・葛を以て括りつけ、楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれを染め、蔓草を取つて襷とした。日本の女の子の着物の模様のはでやかなことは、西洋人の著書によく歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ綺麗である。それがやがて衣服にも移つて來るのである。昔のしのぶずりも、今の裾模様も、つまり同じことである。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染め出した友禪縮緬や、繻珍の帶から下駄の鼻緒の先まで、草木の模様で飾つてある。色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色など澤山ある。中古の女裝束の櫻重ね・梅重ね・山吹重ねなども、四季折々の花に因んだのであつた。

やさしい女流のは當然ともいはうが、武士の戰爭に出立つ甲冑にも、小櫻縅・卯花縅・澤瀉縅などいふのがある。いかにも

芳賀矢一　國學者、文學博士。昭和二年歿、年六十一。

「四圍の風光の凡てが笑つてゐる」

「木材で家を造り、藤・葛を以て括りつけ」

「楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれを染め」

櫻重ね　襲の色目の名。表は白、裏は赤。女房のは上に白を重ね、下に紫を用ひた。冬から春にかけて着用する。

梅重ね　表は濃い紅、裏は紅梅。十一月から翌年二月までの用。

山吹重ね　表は薄朽葉、裏は黃色。女房のは、上から下まで山吹色を重ね、單に青くする。

優美ではないか。また旗やさしものに、蝶や笹、龍膽や澤瀉をつける。皇室の御紋も菊・桐で、德川家のは葵である。今日の家々の定紋にも、桔梗・櫻・梅・鉢・牡丹・蔦・藤・松の類が最も多い。

それから食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅・牡丹餅を始として、菓子屋の目錄を一見すれば、一層その多いことが解る。形も花木に取るのが多い。干菓子には別して多い。汁粉には十二箇月の雅名があり、酒にも櫻正宗・菊正宗がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられ、魚類の料理にも植物を用ひ、牡丹餅を贈るには重箱に南天の葉を敷く。その他庭園の構造でも、室内の装飾・什器でも、家屋の建築でも、凡て植物を用ひ、自然のまゝの趣味を有してゐる。

挿花の術、箱庭作り、繪畫など皆我が國人獨得の伎倆で、特殊

小櫻縅　小櫻革（地を藍染にして、白い小櫻の花形を染めだした革）を細く裁つて縅した鎧。

卯花縅　全體、白絲で縅したもの。

澤瀉縅　種々の色絲で上を狹く下を廣く、おもだかの葉の形に縅したもの。

笹　龍膽　澤瀉

の發達をしてゐる。凡て花を生けるにも、これを描くにも、その生きたまゝ、自然のまゝにするのが美しいのである。枝をむしりとつて花ばかり花瓶に挿しこむのは西洋の風であるが、自然の幹枝をそのまゝに、天地の配合を宜しく現すのが、生花でも盆栽でも日本人の好みである。日本人は自然の友である。眞に自然の心を理解したものである。

我が國の文學に自然を吟詠したものの多いことはいふまでもない。繪畫が花鳥を以て優り、彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が國の文學が自然美を歌ふのを長所とすることが解る。誠に上古から近世までの歌題の大半は、花鳥風月であつた。軍記・謠曲・淨瑠璃なども、敍景の文を點綴して精采を生

「天地の配合を宜しく現す」

「我が國の文學に自然を吟詠したものの多い」

ずる。俳句に至つては、季のないものは句にならぬことになつてゐるのである。凡そ四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことがない。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、卽ちあはれを知ることである。

源義家や源三位頼政や平忠度等が、日本武士として優にやさしく感じられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからである。英雄・豪傑ばかりではない。日本人ほど國民全體にあはれを知つてゐる、卽ち詩人的な國民は、恐らく世界中にまたとあるまい。歌心は誰にでもある。歌は作らぬまでも俳句を作る。上手でなくとも何人も作る。花見・遊山の時にも一興とする。春は花、秋は紅葉、詩人的國民は誠に遊事に忙しいのである。

（國民性十論）

「四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことがない」
「あはれを知る」
源義家　頼義の長子、八幡太郎と稱す。天仁元年（一一〇八）歿、年六十八。
源三位頼政　兵庫頭仲政の子。治承四年（一一八〇）歿、年七十七。
平忠度　刑部卿忠盛の子。壽永三年（一一八四）歿、年四十一。
「歌心」

三手巾

芥川龍之介

東京帝國大學教授長谷川先生は、ヴェランダの籐椅子に腕をかけて書見してゐる。

先生は會心の一章を讀み終る毎に、本を膝の上に置いて、ヴェランダにつるしてある岐阜提灯の方を漫然と一瞥する。

先生の信ずる處によると、日本の文明は最近五十年間に、物質的方面では可なり顯著な進歩を示してゐるが、精神的には殆どこれといふ程の進歩も認める事が出來ない、否、寧ろ或意味では墮落してゐる。では現代に於ける思想家の急務として、此の墮落を救濟する途を講ずるにはどうしたらいゝであらうか。先生は之を日本固有の武士道による外は無いと論

芥川龍之介　文學者。俳號は我鬼。昭和二年歿、年三十六。
＊書見
＊會心
「日本固有の武士道」

斷した。武士道といふは、決して褊狹なる島國民の道德を以て目せらるべきものではない。却つてその中には、歐米各國の「基督教精神」と一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出來るならば、それは獨り日本の精神的文明に貢獻する處があるばかりではない。延いては歐米各國民と日本國民との、相互の理解を容易にするといふ利益がある。或は國際間の平和もこれから促進されるといふ事があるであらう……。先生は日頃から、この意味に於て、東西兩洋の間の橋梁にならうと思つてゐる。

先生は今書見を中途で止めなければならなくなつた。それは突然訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げたからで

「基督教精神」
*歸趣
「東西兩洋の間の橋梁」
*清興

ある。

先生は本を置いて、今し方小間使が持つて來た小さな名刺を一瞥した。名刺には小さく「西山篤子」と書いてある。どうせ今まで會つた事のある人ではないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り頭の中の人名簿を繰つて見た。がやはりそれらしい顔も、記憶に浮かんで來ない。そこで栞代りに名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置いた。

やがて時刻を計つて、先生は應接室の扉を開けた。中へ這入るのと、椅子に掛けて居た四十恰好の婦人の立上つたのとが、殆ど同時である。客は先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黑の紹の羽織が胸だけ細く餘した

*頭の中の人名簿
*恰好

處に、帶止の翡翠を涼しい菱の形に浮きあがらせてゐる。髪を丸髷に結つてゐる事は、かういふ些事に無頓着な先生にもすぐわかつた。日本人に特有な、丸顔の琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は一見して、この客の顔をどこかで見たことがあるやうに思つた。

「賢母らしい婦人」

「私が長谷川です。」

先生は愛想よく會釋した。かういへば、會つた事があるなら向うでいひ出すだらうと思つたからである。

「私は西山憲一郎の母でございます。」

婦人ははつきりした聲でかう名乘つて、それから丁寧に會釋した。

西山憲一郎といへば、先生は覺えてゐる。よく思想問題を

提げては先生の許に出入した。それが此の春腹膜炎に罹つて大學病院へ入院したので、先生も序ながら一二度見舞に行つてやつた事がある。此の婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに思つたのも偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、此の婦人とは、日本の俗諺が「瓜二つ」と形容するやうに、驚く程よく似てゐるのである。

「はあ、西山君の……さうですか。」

先生は獨り頷きながら、小さなテーブルの向うにある椅子を指した。

「どうか、あれへ。」

婦人は一應突然の訪問を謝してから、又丁寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出

*瓜二つ

したのは手巾であらう。先生はそれを見ると、早速テーブルの朝鮮團扇を勸めながら、その向うの側の椅子に座をしめた。

「結構な御すまひでございます。」

婦人は稍わざとらしく室の中を見廻した。

「いや、廣いばかりで一向かまひません。」

かういふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を客の前に直させながら、直ちに話題を相手の方へ轉換した。

「西山君は如何です。別段御容體に變りはありませんか。」

「はい。」

婦人はつゝましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよつと語を切つて、それから靜かにかう云つた。やはり落着いた滑かな

調子で云つたのである。

「實は今日も倅の事であがつたのでございますが、あれはとうとういけませんでございました。在世中は色々先生に御厄介になりまして、……」

「病院に居りました間も、よくあれがお噂を致したものでございますから、お忙しからうとは存じましたが、お知らせかたがたお禮を申し上げようと思ひまして、……」

「いや、どうしまして、」

先生は茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇を取上げながら、憮然としてかう云つた。

「とう〳〵いけませんでしたかなあ。丁度これからといふ年だつたのですが、……私は又病院の方へも御無沙汰して

*憮然

ゐたものですから、もう大抵よくなられた事だとばかり思つてゐました。――すると何時になりますかな、なくなられたのは。」

「昨日が丁度初七日でございます。」

「やはり病院の方で、……」

「さやうでございます。」

「いや、實際意外でした。」

「何しろ、手の盡くせるだけは盡くした上なのでございますから、あきらめるより外はございませんが、それでもあれまでに致して見ますと、何かにつけて愚痴が出ていけません。」

こんな對話をしてゐる間に、先生は意外な事實に氣がついた。それは、此の婦人の態度なり、擧措なりが、少しも自分の息

子の死を語つてゐるらしくないといふ事である。眼には涙もたまつてゐない。聲も平生の通りである。その上、口角には微笑さへ浮かんでゐる。これで話を聞かずに外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、此の婦人は日常茶飯事を語つてゐるとしか思はなかつたに相違ない。先生には之が不思議であつた。

――昔、先生が伯林に留學してゐた時分の事である。ウイルヘルム第一世が崩御された。先生は此の訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、元より一通りの感銘しか受けなかつた。そこで何時ものやうに元氣のいゝ顏をして、杖を脇に挾みながら下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉を開けるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣出し

*日常茶飯事

*留學

ウイルヘルム第一世（1772―1843）フレデリック大王ともいふ。獨逸皇帝。

た。一人は茶色のジャケツを着た十二になる女の子で、一人は紺の短いズボンを穿いた九つになる男の子である。子煩惱な先生は譯がわからないので、二人の明るい色をした髪の毛を撫でながら、頻りに「どうした〳〵。」といつて慰めたが、子供は中々泣きやまない。さうして、しやくり上げながら、こんな事をいふ。

「おぢいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですつて。」

先生は、一國の元首の死が、子供にまでこれ程悲しまれるのを不思議に思つた。獨り皇室と國民との關係といふやうな問題を考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を驚かした

*視聽
*衝動的
*表白

のである。其の時の怪訝と同情とを一緒にしたやうな心持は、今に忘れようとしても忘れる事が出來ない。——先生は今も丁度其の位の程度で、逆に、この婦人の泣かないのを不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく第二の發見があつた。丁度主客の話題が、なくなつた青年の追懷から、その日常生活の細目に及んで、更に又もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が先生の手をすべつて、ぱたりと床の上に落ちた。會話は無論寸刻の斷續を許さない程切迫してゐる譯ではない。そこで先生は半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて床の方へ手を伸ばした。團扇は小さなテーブルの下に、——上靴に隱れた婦人の白足袋の側に、

*怪訝

落ちてゐる。その時先生の眼には偶然婦人の膝が見えた。膝の上には手巾を持つた手がのつてゐる。勿論これだけでは發見でも何でも無いが、同時に先生は婦人の手がはげしくふるへてゐるのに氣が付いた。ふるへながら、それが感情の激動を抑へようとするせゐか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに緊く握つてゐるのに氣がついた。さうして最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間に、さながら微風にでも吹かれてゐるやうに、繡のある緣を動かしてゐるのに氣が付いた。――婦人は顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて顏を上げた時に先生の顏には今までにない表情があつた。見てはならないものを見たといふ敬虔な表

「膝の上の手巾を兩手で裂かないばかりに緊く握つてゐる」

「顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから全身で泣いてゐた」

「見てはならないものを見たといふ敬虔な表情」

情があつた。

「いや、御心痛は私の樣な子供の無い者にもよくわかります。」

先生は眩しいものでも見るやうに頸を反らせながら、低い感情の籠つた聲でかう云つた。

「有難うございます。が、今更何と申しても、かへらない事でございますから。」

婦人は心持ち頭を下げた。晴々した顏には、依然として豐かな微笑が湛へられてゐる。

それから二時間の後である。先生は晩餐を濟ませてヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は何時迄も薄明りを漂はせて、硝子戸を開け

「眩しいものでも見るやうに頸を反らせながら」

＊心持ち

はなした廣いヴェランダは、まだ容易に暮れさうも無い。先生は其の微かな光の中で、さつきから左の膝を右の膝の上に載せて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めて居る。

先生の頭の中は、西山篤子夫人の健氣な振舞で未だに一杯になつてゐた。

（羅生門）

「健氣な振舞」

愛子を失ひて

露の世は露の世ながらさりながら　一茶

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花　同

四　御製謹講

千葉胤明

我が國は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

「そも〳〵我が大日本帝國は天つ御神の末である。されば、神を祭る昔のならはしを忘れてはならぬ、ゆめ忘れてはならぬ。」

「忘るなよゆめ。」と調を強く遊ばした所に、無限の聖慮が窺はれる。こは敬神崇祖の大本をお教へ遊ばされた重い中にも特に重い御製で、畏いけれども陛下の御訓戒は一として御自らの實踐躬行の後に出ないものはない。この御製の御主旨も亦さうであつて、陛下には御神祭を最も御大事に遊ばさ

千葉胤明　高崎正風門下の歌人。宮内省御歌所寄人。元治元年生。

＊手ぶり

「忘るなよゆめ」

＊實踐躬行

れた。御祭祀が御政治の大本であるといふ深厚な御信念があらせられたからであらうと拝察される。

四方拝を始め、定まつてゐる御祭日には、宮中の御親祭を始め奉り、伊勢に御親謁あらせられるのは申すまでもなく、官國幣社に對せられても、勅使又は奉幣使を御遣はしになつて、敬神崇祖の範をお示しになつた。我が帝國の臣民たるもの、報本反始の大本を忘れて、又他に何の道義があらう。此の聖旨を奉體しないで、又他に何の臣道があらう。

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまこ
となりけれ

「目には見られぬ所の神明の心に通ずるのが人の心の誠である。」

「御祭祀が御政治の大本」
* 御親謁
* 奉幣使
* 報本反始

「至誠は神に通ず。」と古人も謂うてゐる。此の御製を拝誦しても、「鬼神も泣かするものは」の御製を拝誦しても、人道は卽ち至誠に存することをよく肝に銘せねばならぬ。平易で而も人道の極致を示させ給うた聖訓である。

庭の面に清水の音はきこゆれどむすぶいとまも
なき今年かな

「御苑の中に湧出づる清水の音は涼しく聞えるけれども、今年は事がしげくて、下り立つて水を掬びながら慰む暇もない。」

こは明治三十七年の御製である。畏くも陛下には御自ら軍國の事を統べさせ給ひ、御内苑にさへ下り立たせ給ふ御暇があらせられなかつたのである。この御製をよく〳〵身にしめて味はひ奉り、萬般の御樣子を拝察して、今日の強大な國

鬼神も……「鬼神も泣かするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり」
* 肝に銘す
「人道の極致を示させ給うた聖訓」
「明治三十七年」

家の基礎を固めさせ給うた天恩の有難さを忘却せぬやうに心掛けねばならぬ。

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草の
うへはいかにと

「照れば照るにつけ、曇れば曇るにつけて、我が臣民のなりはひに妨はないかと、思はぬ時はない。」

「わが民草」と仰せられたので、「照るにつけ曇るにつけ」がしつくり當嵌るのである。この御優しい御製の中に籠る御仁愛は、恰も慈母が嬰兒の寢る間も忘れずに、健全に成長させて幸福な身にしたいと思ふと同じく、陛下の赤子たる七千餘萬の臣民の産業發達に障りはないかと、晴雨につけて大御心を惱まし給うたことが拜察される。吾人臣民たる者は奮勵努力

「御製の中に籠る御仁愛」

して、此の鴻大な天恩に報い奉らねばならぬ。

器にはしたがひながらいはがねもとほすは水の
ちからなりけり

「水は方圓の器に從ふといふ詞のやうに、器次第で如何やうにもなるけれども、いざとなれば堅い巖をも貫き通す。これが卽ち眞の水の力である。」

人もかやうに、外は溫雅謙遜で、しかも內には巖をも貫くやうな剛毅な精神を持つべきである。この御製も水の本質をさら〳〵とお詠じになつた中に、激流巖をも貫くべき强い御教訓が含まれて居ることが拜察される。

新高の山のふもとの民草も茂りまさるときくぞ
嬉しき

* 鴻大
* 方圓の器
「外は溫雅謙遜で、しかも內には巖をも貫くやうな剛毅な精神」
* 剛毅

「新高山の麓、卽ち臺灣に住んで居る臣民も、內地と同じやうに繁昌するのを聞くのは、誠に嬉しいことである。」

「國のため仇なすあだはくだくとも、いつくしむべき事な忘れそ」と仰せられて、御仁惠が大八洲の外にまでも及んだ大御心には、常に新領土なる各方面の狀況を御軫念あらせられたことは申すも畏い。此の御製を拜誦しては、臺灣の臣民も皇恩の有難さが身に沁みるであらう。

遠山の雲も動きて秋の野のちはらかやはら風わたるなり

「遠山の端に棚引いてをつた白雲も動いて、秋の野の茅原や萱原にさら〳〵と涼しい秋風が吹く。」

目路遠い山の端に懸つてをつた白雲も、水のやうに輕く流

「御仁惠が大八洲の外にまでも」

*御軫念

*目路

れて、ところ〴〵穩にあらはれた秋の野の茅原萱原に、秋風が吹渡るといふ廣く鮮かな御趣向である。「景の歌は目に見ゆるやうに、情の歌は心に徹るやうに。」といふが、此の御製などは實に其の光景が目に見えるやうである。歌を評するのに「繪の如し。」などとは能くいふ所であるが、此の御製などは、綿のやうに輕く流れて行く白雲や、茅原の葉の寂しい囁が目に見えるやうであり、耳に聞えるやうである。實に何とも評し奉るべき言葉がない。

（明治天皇御製集）

大帝の御製は既に大帝の御風格そのものであつて、大稜威そのまゝが、帝王調として流露し光被し、ひたすらに景仰し奉るのである。

（北原白秋）

「廣く鮮かな御趣向」

北原白秋　名は隆吉。歌人。明治十八年生。

富士（渡邊華山筆）

五　近世歌人抄

賀茂眞淵

秋の夜のほがらほがらと天の原照る月影に雁鳴きわたる

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷲の翼もたわに吹くあらしかな

加藤千蔭

墨田川蓑着て下す筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ

賀茂眞淵　縣居と號す。明和六年（一七六九）歿、年七十三。

加藤千蔭　本姓橘氏。芳宜園と號す。眞淵の門人。文化五年（一八〇八）歿、年七十四。

墨田川堤に立ちて船待てば水上遠く鳴くほとゝぎす

村田春海

大空はそこはかとなく霞む野に聲のみ落つる夕雲雀かな

心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士のね

小澤蘆庵

波となり小舟となりて夕暮の雲の姿ぞはては消

村田春海　琴後翁と號す。眞淵の門人。文化八年（一八一一）歿、年六十六。

小澤蘆庵　名は玄中。通稱帶刀。享和元年（一八〇一）歿、年七十九。

え行く

人の世の富は草葉に置く露の風を待つ間の光なりけり

香川景樹

事もなき野邊に出でても見つるかなもずが鳴く音のあわただしさに

むら山の高ね〳〵をつたひ來て富士の裾野にかかる白雲

香川景樹　桂園と號す。香川景柄の養子。天保十四年（一八四三）歿、七十六。

良寛

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

秋の日に光りかがやくすゝきの穂こゝの高屋にのぼりて見れば

わが庵の垣根にうゑし八千草の花もこのごろ咲きそめにけり

井手曙覽

山吹のみの一つだに無き宿はかさも二つはもた

良寛　禪僧。俗名山本榮藏。又大愚と號す。天保二年（一八三一）寂、年七十五。

井手曙覽　本姓橘氏。幼名五三郎、後に尙事、更に曙覽と改む。明治元年（一八六八）歿、年五十七。

ぬなりけり

髪白くなりても親のある人も多かるものをあはれ親なし

大隈言道

鶯の鳴く一聲に忘れけり何處にか行く我が身なりけむ

唯ひとり夜ふけてゆけば行く月とわれとのものぞ廣き大路は

大隈言道　野村望東の師。明治元年（一八六四）歿、年七十一。

六　武藏野

國木田獨歩

昨日も今日も南風强く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝ時、林影一時に煌めく。

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の綠の其のまゝでありながら、空模樣が夏と全く變つてきて、雨雲の南風につれて、武藏野の空低く、頻りに雨を送る。其の晴間には日の光水氣を帶びて、彼方の林に落ち此方の杜にかゞやく。自分は屢思つた、こんな日に武藏野を大觀することが出來たら如何に美しいだらうと。

昔の武藏野は萱原のはてなき光景を以て、絕類の美を鳴らして居たやうに言傳へてあるが、今の武藏野は林である。林

國木田獨歩　名は哲夫。文學者。明治四十一年歿、年三十八。

＊降りみ降らずみ　「武藏野の秋の初」

＊大觀

＊絕類の美　「武藏野は林」

は實に今の武藏野の特色といつてもよい。卽ち木は主に楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴る許りの新綠萌出づる其の變化が、秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠蔭に、紅葉に、樣々の光景を呈する。其の妙は一寸西國地方又東北の者には解しかねるのである。元來日本人は、これまで楢の類の落葉林の美を餘り知らなかつた樣である。

「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林のなかに坐してゐたことがあつた。朝から小雨が降りそゝぎ、その晴間にはをり〳〵生暖かな日かげも射して、まことに氣まぐれな空合ひ。あは〳〵しい白雲がそら一面に棚引くかと

秩父嶺　埼玉縣秩父郡に連亘する諸山の稱。

「霞に、雨に……雪に」

「氣まぐれな空合ひ」

思ふと、ふと又、あちこち瞬く間雲切れがして、無理に押分けたやうな雲間から、澄みて怜悧しげに見える人の眼の如くに、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戰いだが、その音を聞いた許りでも季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し聲でもなく、また末の秋のおど〳〵したうそさぶさうなお饒舌でもなかつたが、只漸く聞取れる程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳はつた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のやうすが間斷なく移り變つた。或はそこに在りとある物すべてが一時に微笑したやうに、隈なく

「無理に押分けたやうな雲間から」

＊うそさぶさう

＊しめやかな私語

「照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のやうすが間斷なく移り變つた」

あかみわたつて、さのみ繁くもない樺のほそ〴〵とした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帶び、地上に散り布いた細かな落葉は、俄に目に映じて、まばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたやうなバアポロトニクの見事な莖、しかも熟え過ぎた葡萄めく色を帶びたのが、際限もなく、もつれつからみつして、目前に透かして見られた。

或はまた四邊一面俄に薄暗くなりだして、またゝく間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立も降積つたまゝで、まだ日の眼に逢はぬ雪のやうに白くおぼろに霞む——と、小雨が忍びやかに、怪しげに私語するやうにばら〳〵と降つて通つた。樺の木の葉は著しく光澤が褪めても、流石になほ青かつた。が、たゞそちこちに立つ稚木のみは、總べて赤

バアポロトニク　蕨の類。

「小雨が忍びやかに」

くも黃いろくも色づいて、をり〳〵日の光が、今は雨に濡れた許りの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脫けて來るのをあびては、きら〳〵ときらめいた。」

これはツルゲネーフの書いたものを、二葉亭が譯した短篇の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣を解するに至つたのは、此の微妙な敍景の筆の力が多い。これは露西亞の景で、而も林は樺の木で、武藏野の林は楢の木、植物帶からいふと甚だ異なつて居るが、落葉林の野は同じ事である。

楢の類だから黃葉する。黃葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞つて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉が落ち盡くせば、數十里の方域に亙る林が一時に裸體

「をり〳〵日の光が……きらめいた」

ツルゲネーフ　(1818—1883)、露西亞の文學者。

二葉亭　本名、長谷川辰之助。二葉亭四迷と號した。明治四十二年歿、年四十六。

*冒頭

*敍景

植物帶　又森林帶ともいふ。氣候に寒帶・溫帶・熱帶などある如く、植物界も、大體、寒帶林・溫帶林・暖帶林・熱帶林等に分れる。

「楢の類だから黃葉する。黃葉するから落葉する……」

*一陣の風

になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の日記に「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睇視し、默想す。」と書いた。此の耳を傾けて聽くといふことが、どんなに秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林の中より起る音、冬ならば林の彼方に遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車・荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながらゆく村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれて、近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥て居た犬が耳を立てて、きつと其方を見詰めた。それきりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗の樹も隨分多いから。若し夫れ時雨の音に至つては、これほど幽寂のものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつてゐるが、廣い〳〵野末から野末へと林を

武藏野の樹林

＊睇視「耳を傾けて聽くといふことが、……武藏野の心に適つてゐるだらう」

「鳥の羽音、囀る聲……」

＊斥候

「突然林の奥で物の落ちたやうな音がした」

越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて忍びやかに通り行く時雨の音の、如何にも幽かで、また應揚な趣があつて、優しく懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つた事がある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くが如き趣はない。

秋の中頃から冬の初、試みに中野あたり、或は澁谷・世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲れを休めて見よ。是等の物音が、忽ち起り忽ち止み、次第に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風なきに落ちて微かな音をし、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覺ゆる

「忍びやかに通り行く時雨」

*應揚

中野・澁谷・世田ヶ谷　東京市内西南部。小金井　東京府北多摩郡小金井町。東京水道の上流。櫻の名所。

「永遠の呼吸」

であらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干たる時、星をも吹落しさうな野分が凄まじく林をわたる音を、自分は屢日記に書いた。風の音は人の思ひを遠くに誘ふ。自分は此の物凄い風の音の、忽ち近く忽ち遠きを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ續けた事もある。

熊谷直好の和歌に、

よもすがら木葉かたよる音きけばしのびに風の
かよふなりけり

といふのがあるが、自分は山家の生活を知つて居ながら、此の歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つて居て日の光の最も美しさを感ずるのは、春の末

*星斗闌干

「風の音は人の思ひを遠くに誘ふ」

熊谷直好　名は信賢。歌人・國學者。香川景樹の高弟。文久二年(一八六二)歿、年八十一。

より夏の初であるが、それは今こゝには書くべきでない。其の次は黃葉の季節である。半ば黃色く半ば綠な林の中を歩いて居ると、澄み渡つた大空が梢々の隙間から覗かれて、日の光は風に動く葉末々々に碎け、其の美しさは言ひつくされない。日光とか、碓氷とか、天下の名所は兎も角、武藏野の樣な廣い平原の林が限なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つといふのも、特異の美觀ではあるまいか。若し高きに登つて一目に此の大觀を占めることが出來るなら、此の上もないこと、よしそれが出來難いにせよ、平原の景の單調なるだけに、人をして其の一部を見て、全部の廣い、殆ど限りない光景を想像さするものである。

（武藏野）

日光 栃木縣上都賀郡に在り。男體・女貌其の他の諸山、中禪寺湖・華嚴瀧・東照宮等ある名勝地。

碓氷 群馬縣碓氷郡の西境、長野縣北佐久郡に跨がる峠。

「一面の火花を放つ」

七 板倉勝重

新井白石

天正十六年德川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひ、板倉勝重をばこゝの町奉行に任ぜられぬ。

初め勝重を召され、この職の事仰せ下されしが、その任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更に御許なく、勝重さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ、御返事を申すべけれと申す。德川殿笑はせ給ひて、「さもありなん、罷り歸りて相謀れ。」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悅ぶべき事ありとて告げ知らする人あり。いかなる幸か候。」といひけるに、勝重物をも言はず、ほくそゑみて、衣裳ぬぎ棄て座に直

新井白石 名は君美、字は在中。紫陽・錦屏山人・天爵堂の號あり。德川家宣・家繼に仕へし儒者。享保十年（一七二五）歿、年六十九。

德川殿 家康。

駿河の國府 當時の駿府。今の靜岡市。

* 御家人

板倉勝重 字は甚平。通稱四郎左衞門。德川家の重臣。三河の人。寛永元年（一六二四）歿、年八十。

「妻にて候ものと謀りて」

「德川殿笑はせ給ひて」

「さもありなん」

「物をも言はず」

* ほくそゑむ

り、妻に打向ひ、「さればけふ召されし事餘の儀にあらず。此の度御座所を移さるゝに依りて、彼の町の奉行たるべき由を仰せ下さる。いかにも叶ふべからざる旨を辭し申せども御許なし。さらば我が家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことはいかに思ふ。」といふ。妻は大いに驚きて、「あなあさまし。私事などならば、夫婦はかるといふことこそあれ。公にてかゝる事や宣ふべき。ましてこれは仰せ下さるゝ所なり。殊にその職に堪へ堪へじは、御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候べき。」といへば、勝重「いや〳〵我この職に堪へ堪へじは、我が心一つのみにあらず、御身の心によることにて侍るぞ。まづ心を鎭めてよく聽き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行・頭人などといはるゝ者

*おことと
*べき
*ぞ
*頭人

の、その身を失ひ、その家を亡さぬは稀なり。或は內緣に就きて訴を斷ること公ならず。或は賄賂に因りて、理を判つこと私多し。是等の災は婦人より起る所あり。我若しこの職承らん後は、親しき人のいひ寄らんことなりとも、訴訟のこと執り給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候事ありとも、苞苴（はうしよ）の物受け給ふまじきか。是等の事を初として、おことは勝重の身の上、いかなる不思議の事ありとも、さし出でもの宣ふまじき由、固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずる事は、いかにも叶ふべからず。さればこそ御身と謀るべしとは申したれ。」といふ。妻つく〳〵打聽きて、「誠に宣ふ所理にこそ侍れ。みづからはいかなる誓をも立てなん。とく參りて畏まらせ給へ。」といふ。勝重大いに悅びて、神にかけ佛にかけて堅き

「婦人より起る所」
*苞苴
「誠に宣ふ所理にこそ侍れ」

誓たてさせて、「この上は思ひ置く事なし。さらば参らん。」とて、衣裳引繕ひて出づ。袴の後腰をもぢりて着たり。妻後様（うしろざま）に見て、「袴のうしろ悪しく候。」といひて、立寄りて直さんとす。勝重聞きもあへず、「さればこそ我が妻に謀らんと申しし事は過たざりけれ。勝重が身の上の事、いかなる不思議ありとも、差出で物いはじと誓ひしは、今の程ぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重職承ること叶ふべからず。」とて、又衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さま〳〵の怠状まゐらす。「さらばその言葉、いつまでも忘れ給ふな。」といひて、御前に参る。徳川殿、いかに。汝が妻は何といひし。」と仰せければ、「妻にて候ものが慎みて承れと申し侍る。」と申す。「さこそはあらめ。」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。（藩翰譜）

*怠状

「さこそはあらめ」「大いに笑はせ給ひし」

岡に立つて

長塚節

小春の日光は岡の畑一杯に射して居る。田と、櫟林と、鬼怒川の土手とで圍まれて居る岡の一方は、村から村へ通ふ街道に面して居る。田は岡に沿うて狹く連なつて居る。田圃を越して竹藪の間から草家がぽつ〳〵と見え隱れする。箒草を中途から切離したやうに枝を擴げた欅の木が、そこにもここにもすく〳〵と突つ立つて居る。

鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居るので、近くの水は其の蔭に隱れて見られない。のぼる白帆が半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越して水が白々と見えるあたりは、もう遙かの上流である。だから篠の梢を離れて高瀬舟の

長塚節　正岡子規の門下の歌人。小説家。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

「小春の日光」

鬼怒川　源を栃木縣の西北境に發し、大谷川を合はせて、利根川に入る。

*見え隱れ

高瀬舟　高瀬（淺瀬）をも通過し得るやうに、舟底を淺く平らに造つた小舟。

全形が見える頃には、白帆は遙かに小さく蹙まつて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連なつて見える。更に其の上には筑波山が、一脚を張つて、他の一脚を上流まで延ばして聳えて居る。小春の筑波山は、常磐木の部分を除いては、赭く焦げたやうである。其の赭い項上に、點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。やゝ不透明な空氣は、針の尖でつゝいたやうに、其の白い一點を際立たせて眼に映じさせる。

岡の畑は幾らか傾斜して居るので、中央に立つて見ると、向うの櫟林は半ば隱れて、低い土手のやうに連なつて居る。林の上には兩毛の山々が雪を戴いて、それがぼんやりと白く見える。

*蹙まる

筑波山　茨城縣筑波郡にある山。高さ八七六米。

*一脚を張つて

兩毛　上野・下野の兩國をいふ。

こんな周圍の中に、岡の畑は朗かに輝りわたつて居るのである。土は乾き切つて居る。既に二三寸に伸びた麥は、岡一杯に薄く綠青を塗つたやうになつて居る。

そこにもこゝにも百姓が小さく動いて居る。麥畑をうなつて居るものもあるが、大抵は芋掘の人々である。四五人の手で芋を掘つて居る。畑の緣には、馬が茶の木に繫いであつて、俵が轉がつて居る。此の俵があるので、遠くからでも芋掘の人々であることが判る。馬は退屈まぎれに、どうかすると茶の木を食ひむしることがある。其の時一人が驅けて出て、轡をがらんと一つ極めつけて叱り飛ばすと、馬はまたおとなしくなつて、ばさり〳〵と尾を動かして居る。

百姓の手元は忙しい。しかし岡はたゞ長閑である。日が

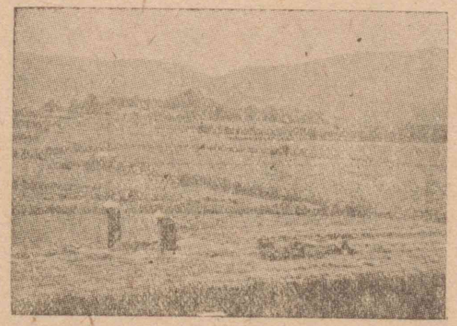
*うなふ

*退屈まぎれ

*極めつけて

「しかし岡はたゞ長閑である」

やゝ傾くと、忽ち筑波山の絶頂から眩しい光がきら〳〵と射す。毎日同じ時刻に、此の光は此の岡へ強く射しかけて來るのである。百姓の或者は筑波山で火を燃やすのだらうなどといつて居るが、それは觀測所の硝子窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば、數時間の中にたゞこれだけである。硝子窓の反射はやがて消えてしまふ。芋掘の人々は勿論此の光を知らないのである。



畑

街道へ下り口の畑でも、一組芋を掘つて居る。隣の桑畑は

葉が大抵落ちて、其の芋畑へも散らばつて居る。青いよわよわしした小麥が生え出して居る。小麥は芋の間に二畝づつ作つてある。芋の莖はべたりと茹でたやうになつて居る。女は芋の莖を菜刀で根元から切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から男が鍬の先で芋の株を掘起して行く。ぴか〳〵と光る鍬の先をざくつと芋の株へ斜に突きたてて、ぐつと鍬を持上げると、大きな土の塊がふはりと浮きあがる。鍬をそつと抜いて先の株へ移る。小麥に障らないやうに極めて丁寧に掘つて、先へ〳〵と行く。女は莖を切つてしまふと後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺ばかり揚げて、どさりと打ちつける。細かに土がほぐれて、こゞつた小芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあら

「大きな土の塊がふはりと浮きあがる」

*ほぐれて
*こゞつた

はれる。それから芋と芋とを兩の掌でぶり〳〵と離して、やがて俵に取入れる。さうして穴の土を手の先でならして、又先の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた丸い穴の跡が一つづつ殖えて行く。日光が其の土を後から〳〵と、細やかに乾かして行く。

世間には、また春が蘇つた。鬼怒川の土手の篠の上には、白帆を一杯に膨らませて、高瀬舟が頻りにのぼるのが見える。船頭が胡坐をかいたまゝ時々舵に手を掛けるだけで、船の舳はぢやぶ〳〵と水に逆らつてのぼつて行く。冬の辛さがここで一度に取返されるので、此の南風の味を占めては、迚も船頭はやめられないといふ時節である。

「ぢやぶ〳〵と水に逆らつて」
「此の南風の味を占めては、迚も船頭はやめられない」

篠の中からは、鶺がそつちこつちへ移りながら下手な鳴きやうをして、麥畑の方へ飛んで出る。

麥が刈られて、さうして椋鳥が群を成して、空を渡る頃、村のうちには毎日麥を搗く杵の響が、大地をゆすつてどこかに聞える。椋鳥はしら〳〵明けに西から疾風のやうな響をなして空を掩うて渡る。さうして夕陽の沒する頃、また西へ歸る。椋鳥が空を遙かに飛ぶ時に、麥搗は杵を持つ手の右と左を持換へながら、「今日も日和だ。」と叫ぶ。

椋鳥が少なくなつて、稻刈になる。刈田の跡の水のやうな、冷たい秋が暮れて、また冬が來る。鶸がよわ〳〵した羽を擴げて、切ない鳴きやうをして、林から刈田を飛廻る。さうして寒さはまた小春に還つて、人々は岡の畑に芋を掘つて居るの

*しら〳〵明け
「『今日も日和だ』と叫ぶ」
*切ない

である。短い日は、村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に、眞倒樣に落ちかゝる。横にさす光は麥の葉をかすつて、赭い櫟の林が一しきり輝く。

畑の縁の茶の木の花は白々と光を帶びて居る。筑波山は見る〳〵濃い紫に染まつて來る。秋の末の晩稻を刈る頃から、夕日の射し加減で、筑波山は形容し難い美しい紫を染出す。百姓に聞いて見れば、嘗てそんな筑波山は知らないといふ。知らないといふのは尤ものことである。日が落ちて殘光がなほ明かな數十分間は、彼等の仕事が尤も捗る時である。晩餐の支度をするために、女達は今どこの畑からも一人づつ立つて行く。手元が漸く薄暗くなる。頰白が淋しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓はそんな事には頓着無しにせつせと

＊晩稻

芋を俵に詰める。

村の竹藪から昇つた靑い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに幾筋も棚引いて、田圃から岡まで屆かうとして居る。其の時、黃昏の中を、百姓は田圃みちを相前後して歸つて來る。何處ともなく鳴がきゝと鳴いて去る。百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から、畑から、次第に天地の間を掩ふのである。

（芋掘り）

筑波嶺に雪は降れども枯菊の刈らず殘れるしたもえに出づ

（長塚　節）

「百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は…」

九　野村望東尼

菊池　寛

幕末の頃、古い世を新しい世にかへようとして、勤王の志士たちが目ざましい運動をおこした時、九州福岡近くの一小村にあつて、志士たちのかげにかくれて、彼等を勵まし助けた一人の女流歌人がありました。それは志士たちが、姉とし母として慕つたやさしい女性で、名を野村望東尼といひました。

望東尼は初の名をもとといひ、文化三年九月六日に、福岡の城下で生まれました。父は浦野重右衛門といつて、福岡藩黑田家に仕へる武士でした。彼女は小さい頃から、武士の娘にふさはしい教育を受けましたが、非常に賢くて、和歌、繪畫、生花、茶の湯、刺繍、押繪、料理など、何一つとして出來ないものはなく、

菊池　寛　文學者。明治二十二年生。「古い世を新しい世にかへよう」

＊女流歌人

文化三年（一八〇六）

中には立派に師匠をしのいだものさへありました。押繪なども、後に野村流といふ新しい一派を開いたほどであります。

二十四歳の時、野村新三郎といふ、やはり黑田家に仕へる侍に嫁ぎました。新三郎には、前の妻との間に三人の子供があり、もとはそこへ後妻としてはひつたのでありますが、夫は勤王の志を持つた教養ある立派な侍でしたので、その夫に仕へ、子供を育てる間に、もとが勤王歌人とよばれるにいたつた原因がつくられたのであります。新三郎は、また和歌もたしなんだので、夫婦は揃つて、大隈言道といふ有名な歌人について勉強しました。大隈言道は後になつて、彼女の歌を、

「私の弟子も多かつたが、彼女ほどの歌よみは外になかつた。」

といつて激賞してをります。

大隈言道　歌人。萍堂と號す。福岡の人。明治元年歿、年七十一。

弘化三年、もとが四十一歳の時、夫新三郎は家を子供に讓つて隱居しました。それから後、もとは夫と共に、福岡から南へ一里ほどの平尾村に山莊を設けて、そこに住みました。この山莊こそ、後に勤王志士たちの集會所となり、維新史に大きな功績を殘した場所でありました。

野村新三郎は、この山莊の庭に楠公の靈を祀つたり、また、志士たちを招いて一しよに讀書したり、議論したりしましたが自ら立つて天下を動かさうとする人ではなかつたので、この山莊での生活は靜かで、全く悠々自適たるものでした。彼が死んだのは、安政六年、もとが五十四の時でした。彼女は非常に悲しんで、直ちに髮を剃つて尼となり、名も松月望東尼と改めました。

「維新史に大きな功績を殘した場所」

楠公　楠木正成。

＊悠々自適

彼女はかねがね一度京都に上り、皇居を拜したいものと願つてゐたのですが、夫の死後三年目に、漸くその望が果たされました。文久元年十一月、孝明天皇の御妹和宮樣が、將軍德川家茂に御降嫁のため、京都から江戸にお下りになることになつたので、その樣を拜觀しようと決心しました。歩いて泊りを重ねてゆく旅で、まして老人の足には非常に困難な旅行でしたが、望東尼は長年の願のかなふ嬉しさに、喜び勇んで出立しました。それにまた、大阪では、なつかしい師の大隈言道に久しぶりに會ひ、夫の遺稿出版の相談をするといふ樂しみも待つてゐたのです。

翌文久二年元旦、望東尼は、皇族方をはじめ、公卿たちが恭しく初の參内をする皇居を拜し、感激して次のやうに詠みました

孝明天皇　第百二十一代の天皇。御在位（一八五六―一八六六）。慶應二年崩御、御壽三十六。

和宮　親子内親王。明治十年薨、御年三十二。

德川家茂　十四代將軍。慶應二年（一八六六）薨、年二十一。

＊御降嫁

た。

白妙のみのしろ衣みるばかり今日九重に降れる白雪

當時の京都には、政權を朝廷に奉還せんとする勤王派、朝廷と幕府の合體による政治を最上とする公武合體派、あくまで幕府を助けようとする佐幕派、なほまた、外國に向つて國を開かうとする開國派それに反對する攘夷派などが、各自、自分たちの意見を天下に行はうとしていきまき、互に策動してゐたやうな世の中でした。

野村望東尼筆蹟

望東尼が宿とした黑田家の用達、比喜多五三郎の分家にも、

「勤王派」
野村望東尼筆蹟　ことの文の林にまじりても咲く色かへぬ山櫻かな
「公武合體派」
「佐幕派」
「開國派」
「攘夷派」
＊策動

馬場文英といふ、かくれたる勤王家がゐました。京都に出るまでの道すぢでも廣く世間を見、また皇居を拜した後、この文英と語るうちに、一層望東尼の勤王の志は固くなるばかりでした。彼女が福岡に歸つてから後、藩内の勤王家で上京する者は、多く彼女の紹介狀を持つて文英をたづねたといふことです。望東尼から文英に送つた、六十餘通の手紙は今も殘つてゐますが、一通として彼女の國を思ふ眞心を示さないものはありません。

望東尼は京都にあつた間に、文英の傳手で、勤王の公卿、近衞公にお會ひしたいと思ひましたが、公は幕府の忌諱に觸れて謹愼中でしたので、望を達する事が出來ませんでした。それでは、せめて志を同じくする近衞家の老女、村岡局に會ひ、眞心

近衞公　近衞忠熙。左大臣。明治三十一年薨、年九十一。＊忌諱。
村岡局　名は矩子。明治六年歿、年八十八。

を傳へたいと、嵯峨野の大覺寺に、やはり蟄居中の局を訪ねますと、局は主人である近衛公に迷惑のかゝることを恐れて會はず、

はるゝと訪ねし君が惠をもしづ心なくあはで苦しき

といふ歌をもつて答へました。望東尼も口惜しく思ひましたが、局の心を察して、

雲井にも君が名高く聞えけり慕ひ來る身をあはれともみよ

といふ歌を殘して寂しく歸りました。

望東尼が京都に着いたのは、和宮様がすでに東へ御出立遊ばされた後だつたので、それが非常に殘念なことではありま

大覺寺 京都市右京區嵯峨野町にある眞言宗大覺寺派の本山。

＊蟄居

したが、皇居を拜し、夫の遺稿出版の運びもついたので、その年の五月、再び平尾の山莊に歸りました。

この旅行で、皇室の御衰微の有樣が、想像以上なのを知り、多くの勤王の志士たちの命がけの活動に接した望東尼の心は固く定まり、この時から、森に圍まれた靜かな山莊は志士たちの集會所にあてられたのであります。

福岡藩の家老で、勤王派の首領である加藤司書をはじめ、平野國臣、中村圓太などといふ人たちがいつも訪ねて來ました。平野は、望東尼とは歌の友だちで、中村圓太は、望東尼の弟子であつたので、共によく憂國の情を歌つたものです。その後、京都清水寺の僧忍向（後に月照）が平野に伴なはれて九州に落ちて來た時、望東尼はこれを山莊にかくまひ、やがて薩摩に逃し

平野國臣 通稱次郎。福岡藩士。

中村圓太 名は無二。福岡藩士。慶應元年（一八六五）歿、年三十一。

清水寺 京都市東山區にある眞言宗の寺。

忍向 歌僧。清水寺成就院の僧。安政五年（一八五八）寂、年四十六。

てやる時には、

旅心夜寒をいとへ國の爲草のまくらの露をはら
ひて

といふ一首をはなむけとして贈りました。しかし、月照は薩摩に入つて後、幕府の追求を逃れかねて、尼の志に背き、西郷と共に海に投じたのであります。

その後、伏見の寺田屋で薩摩の浪士が、事を擧げようとして、却つて、薩摩の藩士に討れた、寺田屋騷動が起き、それに關係した平野國臣が、福岡の牢に幽閉された時も、

たぐひなき聲に啼きつる鶯も籠にすむうきめみ
る世なりけり

といふ歌を贈つて慰めました。美しい聲で啼く鶯はとらへ

西郷隆盛。明治維新の功臣。參議。陸軍大將。明治十年歿、年五十一。

寺田屋　京都市伏見區にありし廻船問屋。騷動は文久二年に起る。

られて、籠の中に住まねばならない世の中ですね、といふ意味であります。望東尼とは意氣投合した友だちであつたこの平野は、また後に、但馬生野で義兵を擧げて捕へられ、元治元年、三十七歳の時、京都の獄で斬られました。

長州藩勤王派の旗頭であつた高杉晉作は、この頃、藩の俗論黨に容れられず、つひに福岡に落ちのび、望東尼の所にたよつて來ました。

丁度その頃、薩摩の西郷隆盛が福岡に來ましたので、福岡の志士たちは、この二人の英雄が會見するやうにと骨折つてゐました。けれど、當時公武合體論が優勢だつた薩藩は、尊王討幕の長州とは反對の立場にあり、藩としては互に敵視し合つてゐたのでした。そのため高杉は、最初、西郷との面會を承知

＊意氣投合

生野　兵庫縣朝來郡。

高杉晉作　號は東行。吉田松陰に師事す。

俗論黨　長州征伐をうけて後、幕府に恭順することを主張せる一派。

「二人の英雄」

しませんでした。

その時、望東尼は、

くれなゐの大和心はいろ〳〵の絲まじへねば綾
は織られず
ものゝふの大和心をよりあはせ末一すぢの大繩
とせよ

といふ歌を詠んで高杉に示しました。小さい爭にこだはるな心を大きく持つて、國の爲に盡くせといふ意味であります。高杉はこれを見て飜然として悟り、西鄕と面會することを承諾しました。やがて、この二人は、望東尼の心を盡くした手料理をさげて、平尾の山にのぼり、共に國事を論じたといふことです。

*飜然
*手料理

高杉が、國を去つてから、長州ではいよ〳〵俗論黨が勢を得て、勤王黨の力は弱るばかりでしたが、彼はこれを見て、兩手を束ねて山莊に日を送つてゐることは出來ません、つひに國に歸つて、藩論をひるがへさうと思ひたちました。彼が望東尼に別れを告げると、彼女はかねて用意の商人風の衣類一揃をとり出して來ましたが、その上には、一首の歌が添へてありました。

まごころをつくしの衣は國のため立ちかへるべ
き衣手にせよ

高杉も非常に感激して、卽座に一篇の詩を書殘して出發しました。

この頃、尼はすでに六十に近かつたのですが、心の底に藏し

た烈々たる熱情は、かうして幾度か多くの若い志士の過を正し、その勞苦を慰め、勵ましたのであります。

さきに長州藩と結んで企てた討幕の密計があらはれて、都落をせられた三條實美以下七卿の内、五卿が太宰府で謹慎してをられたのもその頃でしたが、望東尼は慶應元年二月、太宰府天滿宮に詣でて、密かに五卿に謁したことから、藩の佐幕派から疑をかけられ、同年十一月に、玄海灘海上五里の姫島といふ島の獄に入れられました。縱一間半横二間のうち、便所、警固所を除くと、たつた四疊の板敷に、杉の粗木の格子をはり、南方の海ぞひに、高く小窓をうがつてある……と、望東尼は牢獄の樣子を日記に書いてをります。また獄の樣子を戲畫にして、故鄕への手紙の中に入れて送つたりしてゐます。

七卿　文久三年八月、攘夷論を主張せる三條實美・三條西季知・錦小路頼德・東久世通禧・四條隆謌・壬生基修・澤宣嘉の七卿、五卿は錦小路及び澤を除く。

太宰府天滿宮　福岡縣筑紫郡太宰府町にあり、菅原道眞を祀る。

玄海灘　福岡縣の西北方に位する海洋。

*戲畫

家にねて遠くきくだにうかりにし冬のあら波まくらにぞうつ

この歌によつても、獄の有樣がしのばれます。

姫島にあつて、多くの同志が死刑に處せられたのを聞いた望東尼は、指を切つて血をしぼり、般若心經を寫し、自詠の和歌をそへて、密かに遺族に送つたといふことです。

おくれ居て書くもかひなし法のふみよみがへり
來む傳てならなくに

御世のため心つくしのものゝふのいのちにかはるわが身なりけり

捕へられてから望東尼が書記した姫島の生活記は、「いきのわかれ」「ながれき」「うぐひす」の三卷にわかれ、比賣島日記といひ

般若心經　般若諸經の精髓を記せる短い經。

ます。

翌年の慶應二年になると、長州の藩論も漸くのことで一定したので、高杉晋作は福岡藩の浪士等と謀つて、姫島を襲ひ、かつて平尾で厚い情をかけてくれた老尼を奪ひ返し、長州に連れて行きました。ところが、高杉自身は、あまり激しい活動のために、すつかり健康を害してゐたので、その年の暮から床につき、望東尼の看護の甲斐もなく、翌三年、四月の十三日、二十九歳でなくなりました。

それより前、慶應二年に、薩長の聯合が成立しました。やがて、三年十月十四日には討幕の密勅が薩長二藩に下り、その聯合軍は京都をめざして上ることになりました。望東尼はこれを聞くと涙を流して喜び、その頃身を寄せてゐた山口の小

「薩長の聯合」
慶應三年（一八六七）
「討幕の密勅」

田村素太郎といふ志士の家を出、わざ〳〵三田尻まで來て、討幕軍の勇ましい出陣を見送りました。それから一月と經たぬ十一月六日、望東尼は三田尻の客舍に於て亡くなつたのでありました。

六十二歳ではありましたが、まだしつかりしてゐて、これからも長く生きられた身體であつたのに、彼女はなぜこんなに急に世を去つたのでせう。これには悲壯なわけがあります。討幕軍の出陣を見送つた望東尼は、その翌日から宮市の天滿宮に參籠して、一週間といふもの、一食もとらずに勤王軍の勝利を祈願しました。それが因で病氣になり、いろ〳〵苦勞の後だつたので、つひに再び起たず、旅の空で永眠したのであります。

三田尻　今は山口縣防府市に屬す。

宮市　防府市に屬す。

＊參籠

病氣がもう癒らぬと知ると、

花浦の松の葉白く置く霜の消ゆるもあはれ一さかりかな

雲水の流れまどひて花浦の初霜とわれふりて消ゆなり

と、望東尼は詠みました。

薩長の密勅の下つたその同じ日に、十五代將軍德川慶喜は大政奉還を奏請して、事態は急轉直下しました。

十二月九日には、明治天皇が王政復古の詔勅を下し給ひました。こゝに萬機の政務は朝廷に復し、新しい時代が誕生したのであります。望東尼の死が一月半おくれたらば、この輝かしい光に浴することが出來たのにと思ふと、實に殘念であ

德川慶喜　公爵。大正二年薨、年七十七。
＊大政奉還
＊急轉直下
「王政復古の詔勅」

ります。

明治天皇は畏くも、望東尼の功勞に對して明治二十四年、靖國神社に合祀、正五位を追贈せられ、昭憲皇太后も尼の墓の改修書と金子を賜はりました。福岡の城南千代の松原には、望東尼の招魂の祠が、舊藩主黑田家の手で建てられてあります。

（日本の偉人）

平野國臣

かくばかりなやめる君の御心を安めまつれや四方の國民

みよや人嵐の庭のもみぢ葉はいづれ一葉も散らずやはある

＊合祀
＊追贈
昭憲皇太后　明治天皇皇后。大正三年崩御、御年六十五。
＊改修書
千代の松原　福岡市東公園内。

一〇 東遊記抄

甲冑堂

橘南谿

奥州白石の城下より一里半南に才川（さいかは）といふ驛あり。此の才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に此の寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ僧も住せず、あき寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや寺には見えず、庭は草深く、誠に狐・梟のすみかといふも餘りあり。此の寺中に又一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故將堂とあり、大いさ纔かに二間四方許りの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此の小堂の破損はいふまでもなし。やうやうに縁に上り、見るに、内に佛とてもなく、只婦人の甲冑して長

橘南谿　宮川氏、名は春暉。德川時代の醫者・文學者。文化二年（一八〇五）歿、年五十三。

白石　宮城縣刈田郡白石町。伊達政宗の老臣片倉小十郎の舊城下。當時伊達領の關門。

*あり

*にや

刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像にやと尋ぬるに、佐藤次信・忠信二人の妻なりとかや。其の昔義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞き、秀衡に暇乞ひして鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我が子の次信・忠信を御供に出せり。其の後義經京都へ攻め上り、平家を追ひ落し、一の谷・八島などにて、さばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、初めつき從ひて出たり七龜井・片岡など皆無事にて歸國せしに、次信は八島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命をおとし、兄弟二人とも他國の土となりて形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも、此の人々のごとく歸りなばなど泣沈みぬるを、兄弟の妻女其の心根を推量し、我が夫の甲冑を

「木像二つ」

*とかや

次信　（繼信）。三郎と稱す。源平屋島の戰に斃る。年二十八。

忠信　次信の弟。四郎と稱す。文治二年（一八六）歿、年二十六。

八島　屋島。香川縣木田郡屋島町。高松市の東方約七粁。

能登殿　能登守平敎經。壇の浦に斃る。年二十六。

著し、長刀を脇ばさみ、いさましげに出立ち、只今兄弟凱陣せしと、其の俤を學び、老母に見せ、其の心を慰めしとぞ。 其の頃の人も二人の婦人の孝心をあはれに思ひしにや、其の姿を木像に刻みて殘し置きしとなり。 嗚呼、兄弟の人は、古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。 其の人につれそひし婦人、又稀代の孝女にて夫婦忠孝の勝れしも世に珍しきことなり。 余此の物語を聞き、此の像を拜するに、そゞろに落涙せり。 かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かく荒れはてたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、彩色も落ち失せ、僧だに守らで香花を供する人もなく、年月に荒れ行き、終には跡かたもなくなりはて、是等のことをも語り傳ふる人もなくならんを、誰ありてあはれといひて、一錢の參物をだに供する人もなきは、世には

「只今兄弟凱陣せしと」

＊とぞ

＊となり

「そゞろに落涙せり」

忠孝に感ずる人のすくなきにや、あまりにあはれに覺えしかば委しく書きつけ歸れり。

松島

書きしるすまに船行過ぎて、四方の景色を見洩らさじとするに、心のいとまなくして十分の一もしるし得ず、八百八島ありといふ、誠に數百に餘れりと思ふ。 鹽竈の千賀の浦より松島まで二里半の間、泉水の如く、海また甚だ深からず、五六尺或は七八尺許りに見えて、底甚だ明かなり。 かくの如く島の間皆入海なれば、風ありといへども波立つことなしといへり。 此の島々の松、皆赤色にして枝皆下に垂れ、作れる松の如し。 故に其の景色艶美にして猛からず。 扨舟を雄島に着けて上り見るに、雄島頗る大なり。 此の島は見佛禪師の座禪の地な

「書きつけ歸れり」

鹽竈 宮城郡鹽竈町。松島灣に臨む。古へ、鹽釜明神が製鹽の業を民に授けた處といふ。

「艶美にして猛からず」

「雄島」 見佛禪師 高僧。庵

り。其の堂宇今に連なれり。島の南邊に高さ一丈に餘れる碑あり。元の僧寧一山、鎌倉建長寺に住持せし時、見佛禪師の爲に書する碑にして、字體は草書なり。苔封じて文字見えがたきところ多し。世の人石摺にして珍重する石碑なり。

雄島

其の外此の雄島には、芭蕉の朝な夕なの吟をはじめ、俳諧者流の發句の碑、或は騷人の詩碑等甚だ多し。然れども此の佳景に對すべき作は有りぬとも覺えず。さて雄島見廻りて大なる橋を渡り、他の島にのぼり、又その島より橋にて松島に渡る。今松島と名づくるところは陸地にて、町家軒を竝べたり。多く

を雄島に結んで苦行すること十六年。法華六萬部を誦し、よく靈應を顯したといはれる。鳥羽天皇その道譽を聞し召され、佛像・寶器を賜うた。

鎌倉建長寺 鎌倉五山の一。建長五年(一二五三)北條時頼の創立。建長寺派(臨濟宗)の本山。

芭蕉 松尾氏。俳諧正風の祖。元祿七年(一六九四)歿、年五十一。

「俳諧者流の發句」

*「人

「松島」

は皆旅館なり。松島の町耕作の地少なければ農人にもあらず、又此の地は瑞巖寺の下にて殺生禁制のところなれば漁獵の者にもあらず、他の街道にあらざれば商家にもあらず。大方は只松島の景色遊覽の人を宿して渡世とする事なり。瑞巖寺は町の西北にあり、禪宗にて大地なり。開山は世に名高き眞壁平四郎入道なり。此の松島の町よりは景色見がたし。景色は只舟行の間なり。扨兼ねて仙臺の人のいひしには、松島に遊ぶ人は必ず富山に登るべし。松島の景は富山に留まれりと聞きしによりて、又富山に至る。東北に當りて其の道五十町有り。富山と云へば觀音の靈場にて、田村將軍の開山なりといふ。高さ十丁ばかりもありて、此の邊にては第一の高山なり。此の山の絶頂の南邊に富春山大仰寺といふ寺あ

瑞巖寺 初め松島寺といふ。天長五年(一四八)慈覺大師の草創。天台宗であつたが、眞壁平四郎法心を開祖として禪宗となり、圓福寺と改め、雲居禪師の中興後、青龍山瑞巖寺と改めた。

眞壁平四郎 僧名法心。入宋して無準禪師に學び、歸朝後、北條時頼の命によつて入山した。

「富山に登る」

田村將軍 坂上田村麿。弘仁二年(一四一)歿、年五十四。

り。此の寺の書院の庭より東南の方を見れば、松島の全景一望の中に備はる。大抵東西二三里に南北六七里許りと見えて、八百八島連なれる風景、繪にかける西湖の圖に甚だ似たり。遙かに眼をめぐらせば東洋限りもなく、誠に天下第一の絶景、筆紙に盡くすべきにあらず。人によつて松島は俗景なりといふも、あまり綺麗にして畫圖の如きゆゑにいふなるべし。余既に天下をめぐり盡くして名勝の地至らざるところもなきに、實に此の松島の風景に比すべきもの又他所に見ることなし。此の庭に一生をもをへたき心地すれど、千里外の旅の身さてあるべきにあらねば、親しき人に別るゝ心地して寺を下り、又松島にかへり、松島より陸地をへて鹽竈の杉坂に歸る。松島と鹽竈との陸路は山に隔てられて景色見えず。初め思

西湖　支那浙江省杭州の西にある湖。支那の最も著名な勝地。

*畫圖

「鹽竈」

ひしは、舟にて行かんは海上危くも有るべし。殊に景色を見るには歩むこそ心靜かにしてよかるべけれと、既に陸地より松島に遊ばんとせしに、宿の主諫めて、松島の景は舟行にあり、陸路よろしからず、まげて我が詞に從ひ給へといふにぞ、舟買ひて遊べり。誠に宿の主のいひし如く、陸路にては景色一つも見るべからず、其の海上も泉水の如くなれば、いかなる風雨の時といへども危きことは有るべからず。松島にあそぶ人は是非ともに舟行すべきことなり。又富山に登るべきことなり。

（東遊記）

「舟行」

舟と岸と話してゐる日永かな　（子規）

東遊記　五卷。著者が東海・東山・北陸を遍歴せる間に見聞せる奇事異聞を錄せるもの。

子規　正岡氏。愛媛縣松山市の人。俳人。明治三十五年歿、年三十六。

一一　パナマとスエズ

山崎直方

パナマとスエズと。我々は之を比較する時、種々の對照を發見するのである。

同じ熱帶ではありながら、スエズは一望百里の沙漠の中を貫いてゐる。東烈日アラビヤの黃沙を照してシナイの連嶺磽确を極め、西、ナイルの三角洲を隔ててサハラに落つる夕陽は、天に異常の紅を潮してゐる。吹來る風は全く乾いて燒くが如く、しかも天氣はいつも朗かである。パナマは之に反して、到る處、山にも岡にも蓊鬱たる熱帶の原始林がよく茂つてゐる。カリブ海から吹送る濕氣は、凝りて雲となり、雨となり、絶えず之に灌いで、綠の色は滴るやうであり、いづれの谷川も、

山崎直方　理學博士。昭和四年歿、年六十。

パナマ　パナマ地峽を横斷する運河。

スエズ　地中海より紅海に通ずる運河。

「對照」

アラビヤ　アジア西南部の大半島。

シナイ　スエズ灣とアカバ灣との中間に位する半島上の山。

*磽确

ナイルの三角洲　ナイル河口に生成せる三角形沙洲。

サハラ　アフリカ洲北部の大沙漠。

*蓊鬱

カリブ海　西印度諸島・南米間の大西洋内海。

水は常によく充ち溢れてゐる。自然の風物が既に、全く前者と異なつてゐる所があるのである。

又そこに開かれた運河を見るに、スエズは如何にも鶴嘴と圓鋤で營々として掘開いた痕が見える。固より蒸氣仕掛のジャッガーも働いたではあらうが、何となく、幾千年前に金字塔を築いた勞力と同じやうなものが繰返されたのではないかと想はれる。パナマに至つては、どこまでも現代科學の變形としか見られない。其の設計からが既に奇拔である。そして其の施工がどこまでも機械の力である。岩一つ碎くにも壓搾空氣で錐を揉んでゐる。土を運び人を送るのも電氣の力で、水底を浚ふには蒸氣の力でやつてゐる。工事に使用された人員が幾萬とか稱せられてゐて、それが如何にも少な

「自然の風物が既に……」

*圓鋤

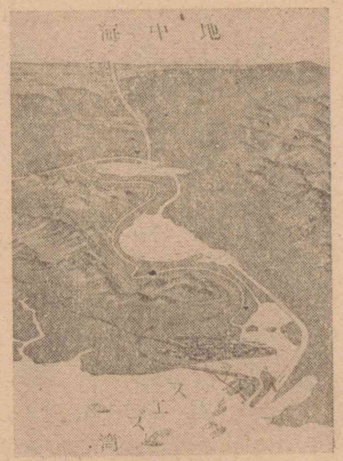
ジャッガー　刻目をつける器械。

金字塔　ピラミッド。埃及往古の帝王墳墓の一。

「金字塔を築いた勞力」

「現代科學の變形」

く感ぜられるのは、要するに機械の力で人の手を極端に省いての最小限數であるからである。工事のみかは、開通後の今なほ、閘門を開閉するにも、船舶を出入せしむるにも、其の原動力は運河そのものの落差から來る電力に外ならぬのである。これがスエズ竣工後の僅かに半世紀もたゝぬ間に於ける變化であることを思へば、科學の進歩も恐しいものである。



スエズ運河鳥瞰圖

レセップスはスエズ運河を完成した。其の功績を記念する彼の巨像はポートサイドの防波堤上に高く聳えて、往來の

*閘門
*落差

レセップス (1805—1894) フランスの工師・外交官。

船客の景仰する所となつてゐる。併し其の運河に於ける佛國の勢力は如何。運河會社の株式の多數は英國に移つて、英國はその實權を收めてゐるではないか。レセップスは不幸にしてパナマに蹉跌し、又多大の資金を費して十年の經營を敢へてして來た佛國の運河會社は、遂に運河を捨賣にして引下つてしまつた。而して其の後を引受けてよく成功したものは米國である。ラテン民族の人も國も、創業に於ては非凡の計畫も立つれば、又ある程度までは之を遂行する。然も永遠守成の功を齎さぬ憾があるではないか。その蒔きもし培ひもした樹から最後の美しい果實を收めてゐるのは、いづれもアングロサクソンの徒ではあるまいか。固より運河のみを以て直ちに二民族を比較する事は出來ないが、南米の東岸

ポートサイド スエズ運河の北端にあるエヂプトの海港。

*蹉跌

ラテン民族 西班牙・葡萄牙・伊太利・佛國などの民族。

アングロサクソン 英人血統。大陸サクソン族と區別する英國サクソン族に對する名稱。

に於ても、殊に西岸に於て、其の國を立てた者は、何れもイベリヤのラテン民族である。然も其の富源を培ひ其の果實を收めてゐる者は、又主として英・米の國民である。二民族の特色は實に到る處に、よく發揮されてゐる感がある。

更に兩方の運河を比較して見るに、スエズは其の所在地も運河も、實權は英國の勢力の下にあるが、しかも運河は依然として私の營利會社の經營する所であつて、國際運河として開放されてある。而してパナマは如何。運河地帶は米國の國有である。他國の領土を租借してはゐるものの、實は買收したも同樣で、本國の延長に異ならぬのである。彼等は此の地帶を呼ぶにテリトリーなる語を慣用して、ハワイやフィリッピンと同樣に見做してをり、世人も亦之を米國の領地として

「國を立てた者は……ラテン民族」

イベリヤ　今の西班牙・葡萄牙、及び南フランスの一部を含んだ古國。

「果實を收めてゐる者は、又主として英・米の國民」

*租借

テリトリー　領土。

ハワイ　布哇。北太平洋中にある十餘の諸島。

フィリッピン　アジアの南方太平洋中にある群島。バシー海峽を隔てて臺灣に對す。

怪しむものがない。而して運河其の物も亦、開鑿經營共に國家が自ら其の衝に當つてゐるのである。パナマ地帶の徽章には「陸地は斷たれ世界は結ばる」との標語が書いてある。何人の考へたものか、如何にも名句である。如何にも運河によりて南北の大陸は切離されたが、東西の兩洋は結ばれたのである。之によつて世界の交通に革新の時期を劃したのは疑ふべくもない。庶幾くは何等の條件なしに、此の語の精神を貫徹する樣に力めて貰ひたいのである。しかし米國の大にしてもなほ未練がある。彼は未だ之を全く世界に提供して國際的のものとしようとは敢へてしない。其の河口には要塞を設けて嚴重に防備してゐる。一朝事ある曉には、運河は全く閉鎖せられるのである。而して彼は獨りパナマの防

*衝に當る

「陸地は斷たれ世界は結ばる」

備のみを以て滿足するものではない。パナマの北から東へかけて、カリブ海を包んで弓狀に排列されてゐる西印度諸島の島列を以て、パナマの前哨第一線と心得て居る。彼は其のフロリダ半島と一衣帶水を隔つるキユバに於ける西班牙の勢力を滅して、之を其の保護の下に置いてゐる。列島の中央にあるポルトリコ島は既に其の領土となつてゐる。更に其の東に隣れるヴァージン諸島の如きは、從來大海の一粟として殆ど一顧の價値もなく、其の本國デンマルクの如きも維持に苦しみ、持ちあぐ

パナマ運河と歐洲

*前哨

フロリダ半島　アメリカ合衆國南端の一州。

*一衣帶水

キユバ　メキシコ灣の東南に位する島嶼。

ポルトリコ島　北アメリカ西印度諸島中の米領。

ヴァージン諸島　ポルトリコ島と小アンチル列島との間にある小島。「大海の一粟」

んで居たほどのものであつた。所がパナマが開通すると共に、それが歐洲に至る直通航路の衝に當つてゐるので、米國は此の要點を見逃すだけに愚かではなかつた。直ちに巨額の金を投じて之を買收し、其の領土としたのである。其の備ふるに周到なる、概ねかくの如しである。軍備縮小などは、須らく此の世界の公道を脅威する要塞等の施設を撤廢して後に、始めて提唱すべきことではあるまいか。

又更に他の方面から見るに、スエズ運河の開通が英國を利したことは一にして足らない。印度に達する捷路を得たるが如きは蓋し其の尤なるものである。濠洲航路も亦之が爲に短縮されたことが少なくないのである。スエズは實に英國の爲に、又其の最大重要なる領土のために正門となつてゐ

「備ふるに周到なる」

*脅威

*撤廢

*捷路

るのである。加之、其の船舶は近東に、極東に、將た東阿に、南阿に、到る處に航路を有つてゐるのである。されば、よし多少の消長はあるにせよ、此處を通過する英國の船舶が、依然として獨り列國の群を拔いてゐることは怪しむに足らないのである。パナマに於ては卽ち如何。開通の當時に於ては、英國の船舶は數年間常に隻數に於て其の首位を占めてゐたのであるが、戰後平和の時に入るに及んで、米國の下風に立たざるべからざるの地位に陷つたのである。今後、是等の方面に於ける英・米の角逐は、更に如何なる結果をパナマ通過船舶の數字の上に現して來るであらうか、姑く之を數年の後にトせんと思ふのである。

（西洋又南洋）

＊消長

＊角逐

「船舶の數字の上に」＊トす

一二線の上

吉江喬松

銅色に明け初むる埃及（エヂプト）の黎明、
天地のけはひもつかぬおほらかな搖めき。
消えゆく闇を一角にたゝえた巨塊の屹立——ピラミイト。

薄明の底から一道の生氣が立ちのぼる。
重い歷史の積層をはねのけて、
常に生きて流るゝニイルよ、
老大陸の胸から無限の生命を澎湃として導き來る、

吉江喬松　文學博士。早稻田大學教授。昭和十五年歿、年六十三。

「埃及の黎明」

埃及　ナイル河に沿ひ、世界史上人類の最初に國家的生活を營みし地。帝國の一部なりしも西紀九一四年革命後獨立し一王國となる。

「ピラミイト」

ピラミイト　埃及古代の帝王の墓。

「生きて流るゝニイル」

ニイル　又ナイル。アフリカ洲第一、世界第二の長流。延長五七〇〇粁。白・青兩ナイルより成る。ナイルよ。

日はのぼる黃沙の果て、
影はゆらめく金字塔、
ニイルが育てあぐる一望の綠野、目醒めたる碧玉を
地にしいて、
無限の黃沙と接續し、目路の果まで竝行を展開する。
地平線の彼方、雲は湧く、
舊き歷史と原始自然との交錯する埃及の曠野、
綠の生氣と無始無終の黃沙とが織り出す人文の色
彩、
その分岐の一線上を悲しくもまろび行く小さな黑
影！

（詩と隨筆集）

「日はのぼる」
「一望の綠野」
「人文の色彩」
「小さな黑影」

一三 太平洋時代

田中寬一

日本文明の發達の跡を顧みれば、常に外國文明を取入れて之を日本化して來た。卽ち印度に起つた佛教を取入れて益〻發展せしめ、今なほ之を保存して居る。支那から儒教を輸入して、これ亦その思想をとつて自己のものとし、加ふるに國字を工夫して國文學を起した。キリスト教は遙か後に輸入されたが、漸次日本化しようとして居る。而して現代は科學を輸入して之を利用する時期が到來しつゝある。見來れば皆外國文明の模倣のやうであるが、純粹の模倣ではない。模倣しては自分のものを作つたのである。或は少なくとも之を體得した。佛教も儒教も、その發祥地に滅びて日本にのみ殘

田中寬一　文學博士。東京文理科大學教授。明治十三年生。

＊外國文明
＊儒教
＊キリスト教
＊模倣
＊體得
＊發祥地

つたのである。更に考へるに、過去に於ける日本では、優良なる素質を有するものが戰術と宗教の方面に集つた爲に、他の文化的事業に於て貧弱であつた感がある。然るに今や偉才はあらゆる方面に向つて居るから、若しも我等及び我等の子孫が、先輩によつて示された模範に倣つて努力をつゞけて行つたならば、必ずや近い將來に東西の兩文明は日本民族によつて渾然たる一體に融合せしめられ、古今未曾有の大文明が東京を中心として起るであらう。その理由の主なるものは、

(一)　西洋文明は分析的であるから、之を學習することが容易である。これに反して日本の文明は綜合的であるから、歐米人が日本の文明を理解することは、日本人が西洋文明を體得する樣に容易には行かない。而して日本民族は此の比較

*文化的事業

*古今未曾有の大文明

「分析的」

「綜合的」

的學習に困難な方面を先づ發展せしめ、更に西洋文明を輸入して居るから、兩種の文明を融合するに最も好都合な立場にある。吾等の祖先と現代の日本民族は、國語の學習に極めて多くの負擔を荷ひ、その上に外國語を學習する爲に二重の重荷に苦しんで來たが、その努力は今や漸く酬いられようとして居るのである。

(二)　二つの高い文明を融合したものは、その一つのものを發達せしめたものよりも一層高い文明である。此の意味に於て、東西兩文明の長所を採つて融合したものは、古今未曾有の最高文明である。

(三)　先進國は天產物が豐富である上に自然科學の知識を極力應用して居るから、所謂文明の弊を早くから受けて居る。

「二重の重荷」

「一層高い文明」

*自然科學

「文明の弊」

而して今やその弊に耐へられない情勢を呈しつゝある。文明の弊の中で最も重大なのは、歡樂を追求して物質過重主義になることと、種々の原因によつて出產率の減少することである。

(四) 日本の位置は東西兩文明の接觸點として最も重要な地位を占めて居り、その氣候は文明の發達に適して居ることである。

ルーズヴェルトは曾て次の樣にいつた。曰く、「昔、羅馬帝國の衰亡と共に、地中海時代は終りを告げた。大西洋文明の時代は目下その絶頂にあるが、これまた遠からず資源の枯渴を見るに至るであらう。而してこれに代るものは實に太平洋時代である。惟ふに太平洋時代は前記三時代中、最盛を極めるものであらう。それは世界全人類を包容して一團となすものであるから。抑人類は次第に西方へと移住を行ふもので、その結果遂に地球を一周して、今やアメリカの西部の人々は、太平洋を中央にしてアジア大陸在來の人種と相對立して居る。米國人の運命は、右人類の新運動に伴なふ難關の第一線に立つものである。」と。

太平洋時代は既に到來した。而してこゝに大文明の起るべき機會に遭逢した譯である。日本民族の使命は實に重大である。而して日本民族は、この重大使命を遂行するに十分な心身の力と、適當な氣候とに惠まれて居るのである。

(日本民族の將來)

* 追求
* 物質過重主義
「位置」
「氣候」
ルーズヴェルト (1858—1919). アメリカの政治家。第二十六代大統領。
「羅馬帝國」
「大西洋文明」
「太平洋時代」
「人類の新運動に伴なふ難關の第一線」
「太平洋時代は既に到來した」
* 遭逢
「日本民族の使命」
「惠まれて居るのである」

一四 冬の日記

戸川秋骨

一月――日

冬の畠は全く無事である。只秋に種を播いた豌豆と蠶豆との芽が霜にも負けず、雪に蔽はれては却つて生長して行くばかりである。春の用意は冬の寒中に於てすべきだ。僅かばかりの畠地ではあるが、今何も作つてないあいた所にまち肥料を置く。肥料は自給である。

樹木にもそれが必要だといふ。所謂寒肥を施さなくてはならない。鍬を取つて一本の樹のまはりを掘ると、寒さのために地は氷つて居て、掘れはするが、土の一塊一塊は殆ど石のやうに固い。小さい庭の樹木の半分ほどに肥料を施したら

戸川秋骨　名は明三。文學者。慶應義塾大學教授。昭和十四年歿、年七十。

「春の用意は冬の寒中に於てすべきだ」

＊自給

もうくたびれてしまつた。短い冬の日ももう暮れて來たので今日はこれでやめる。

一月――日

夕食が終つて、一家がまだ食膳のまはりを去らない時に、よく私は昔の話や、自分の話をするのが癖になつた。子供達が食物に就いてかれこれ文句を言ふのを、多少誠める心持もあつて、自分の幼時なども言出す。おかあさん――お前方のあの死んだお婆さん――が良くこのおとうさんに言つて聞かした事だが、おとうさんの子供の時分は非常に貧乏で――おとうさんの又おとうさんはうちを留守にして何處かへ行つて居たのだ――日々の食事さへ碌に出來なかつた。或時などはもうお米を買ふ事も出來ず、御飯がたべられないのでお

「食膳のまはりを去らない時」

とうさんとおとうさんの弟とが、おなかがすいた、すいた、とやかましく言ふので、ほんとに困つてしまつた事さへあると、私はそんな話までした事もあるが、子供達にはそんな事もお伽話のやうにしか思はれないらしい。いや成長する力に充ちた子供達が親のやうな氣分になつたら、それこそ困つた事だ。こんな悲慘な事はお伽話として聞いてくれる方がよい。そんな話を聞かされた子供の一人は言出した。おとうさんの話はいつでも昔の貧乏であつた事だが、おばあさん——母方の現在達者で居る老人——の話は、いつでも昔の自分の榮華だ、と云つて笑つた。なるほど左樣言はれて見ると、このおばあさんは昔日の繁昌ばかりを口にする。左樣だ、貧乏にせよ、榮華にせよ、昔の事を口にするのは、つまり愚痴だ、これはやめた方が良いかも知れない。子供の訓誡などにはあまりなり得まいから。併し愚痴ではあるがまた兩方とも一種の自慢でもある。若しさうとすれば貧乏であつた自慢の方が、今日としては話し榮のある自慢だぜ、と云つて私も笑つた。

一月——日

久し振りでエマスンの勇壯論を讀んだら次のやうな一節があつた。

「ブルウタスに就いて恁ういふ話がある。ブルウタスがフイリピの戰後、自刃しようとした時、ユウリピデイスの句を引いて『あゝ德操よ、吾は終生汝に從へり。而も今にして結局汝の影に過ぎざるを見る。』と云つたさうである。私は勇士ブルウタスがこの話に依つて侮辱されたものである事を疑は

「話し榮のある自慢」

エマスン（1803—1882）アメリカの大思想家。

ブルウタス（紀前85—前42）古代ローマの政治家。

ユウリピデイス（紀前484—前407）古代ギリシャの悲劇詩人・思想家。

ない。勇壯なる心の人は、その心の正義とその貴さとを賣りものにする事はない。勇壯の人は美味を喰ひ、暖かく眠る事を願ふものではない。偉大なる事の要素は、德そのものを以て足る事を覺るにある。貧困はその裝飾である。それは飽食暖衣を要せず、損失にも甚だよく安んじ得るのである。」

とエマスンは言つて居る。德を守つたが爲に、却つて身の不幸を招いたのは當然である。さうあるべき筈である。それをプルウタスとも言はれる人が、最後の自分の滅落を見て、それまで守つて居た德が影に過ぎないなどと呪詛の言を吐いたのを、怪しんで、それは作り話であるとエマスンは斷言して居るのである。德を罵るのも悲壯で、プルウタスに對する一片の同情でもあらうが、エマスンのやうに考へるのが眞實で

*飽食暖衣

「德を守つたが爲に、却つて身の不幸を招いたのは當然である」

*呪詛

あらう。世の中は善人亡び惡人榮えると考へるのも、あまりであらうが、榮枯盛衰と德とは何のかゝはりもないとするのが、正鵠を得た考へ方ではあるまいか。

二月——日

冬の美は霜にある。靜かな晴切つた朝でなければ霜を見る事は出來ないが、さういふ朝はどんなに寒くても、身體が引締つて心持がよい。霜の美は老境の美である。自然は死んだやうに見えるが、それが霜に蔽はれて居る光景は、その霜に恐るべき生物を枯死させる力のあるに拘らず、却つてそれに依つて生かされて居るやうに見える。地上は一面にその白い薄物を以て敷きつめられて居る。枯草も一本々々その薄物によつて包まれてゐる。殊に枯れ殘つて居る雜草の細か

*正鵠

「老境の美」

い細かい而も密集して居る纖維が丹念に細かく、一筋々々、一部一部、それに依つて包まれて居るのは、自然の内に比べるものののないほどの美觀である。細かいレエス、佳人の著た薄ものは僅かにそれに比べられるものであらうけれども、人工は如何なる纖細な技を以てしても、この姿を髣髴させる事は出來ない。一年を通じて自然界に見る珍しい光景は、春に見る若い草花の顆割と、この枯草の霜を被つた姿とである。私は冬の自然は、その光景は、大きなものと思つてゐた。その極致は崇高にあると考へて居た。今にしてこの微細な處にも、小味な美しさのあるのをうれしく思つた。この霜を踏んで木立のほとりを歩いて居ると、忽ち傍のかれた叢の間から名も知らない小禽がさつと飛立つ、あとにはその小枝から蹴散ら

レエス 裝飾用の布。

* 髣髴

* 顆割

された霜が粉のやうに落ちて來る。

さう、自然のあらはれ方はいろ〳〵である。春の華やかさ、夏の豐潤、秋の蕭條、それ等に比べると、冬は矢張り、むしろ崇高の趣を主とするのであらう。木の葉がみな凋落して居るから、どこまでもが見透しになる。光景は廣く大きくなる。廣野や高山の姿は恐らく冬になるとまた特殊の趣がある。

（隨筆集）

「崇高の趣」

余は霜を愛す。その凛として潔きがために、其の牢晴を報ずるが爲に。晴美なるは霜白き時の朝日なり。東の空金色さして杲々たる旭日一點の翳なき空にあらはれ、億萬條の光線の一面の田野の人家を射、霜は皎々晶々として表に白光を放ち、陰に紫の影をおとしぬ。

（德富蘆花）

德富蘆花 名は健次郎。文學者。昭和二年歿、年六十。

一三五 人工の翼

島崎藤村

けふも町の空に發動機の爆音を聽いた。

二三の航空機が乾いた寒空を衝いて飯倉の町の上を横ぎつて行つた。いつぞや遠く獨逸の方から訪れて來た一臺のツェッペリンが、この町の空にあらはれた時は、銀色の機體に黑く記された文字があざやかに讀まれたほどで、やがて光の海を渡る船のやうに遠ざかつて行つたが、あの鋭く美しいものの姿はまだわたしたちの記憶に新しい。今やグライダアのやうなものまで出來て、あの滑翔機の曳航飛行が各地に行はれるだらうといふ噂なぞも、さうめづらしいことではなくなつた。過去數世紀の間、その往來に數週間もしくは數ケ月

島崎藤村　名は春樹。文學者。明治五年生。

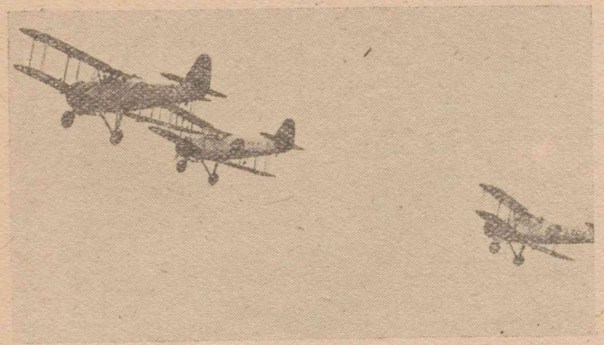
飯倉　東京市麻布區。

ツェッペリン　ドイツのツェッペリンの研究になる飛行船。

「光の海を渡る船」「鋭く美しいものの姿」

グライダア　發動機なき滑翔飛行機。

を費した太平洋上の交通ですら、僅かに數日間で相接觸することの出來る定期航空路の開設を見るのも最早そんなに遠いことではなからうと言はれ、やがては旅客、商品、および郵便物があたかも田舍から田舍へ行くやうに何の造作もなく太平洋上を行き交ふことになるだらうとも言はれる。



飛行機

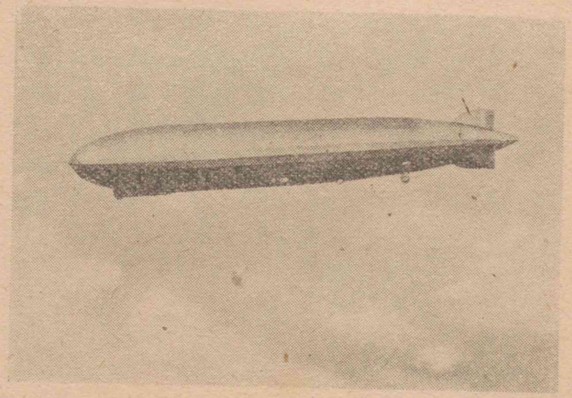
大空を飛ぶ人工の翼こそは、まことに現代を象徴するものの一つであらう。佛蘭西近代の畫家として知られたシャヴァンヌ

＊定期航空路

「大空を飛ぶ人工の翼こそは、まことに現代を象徴するもの」

シャヴァンヌ（1824—1898）

は、普佛戰爭當時の記念として巴里籠城の圖を作り、遠景の空に浮かび上る輕氣球を描き、その前景には一羽の鳩を持つ婦人を描いて佛蘭西人が平和を待つ心をあらはした。シャヴンヌの筆によつて描き出された淸げに美しい婦人の眸は、ながら救ひを望むもののやうに遠い輕氣球の方角にそゝがれてゐる。これが今日のことにして見たら、あの輕氣球も新鋭な航空機に置き替へられなければなるまい。



ツェッペリン飛行船

普佛戰爭　西紀一八七〇―七一年、プロシヤ外十州とフランスとの間に起りし戰爭。

「平和を待つ心」

しかし、この現代に生きるものに取つて忘れてならないやうな好い教訓を與へた人がある。それは先年、太平洋横斷の冒險に成功した亞米利加の飛行家だ。飛行家ほど自然の征服者のやうに見えるものもないが、その實、高く飛ぶことによつて、より大きな自然の懷裡に飛込んだことを身をもつて證據立てたのも、あの亞米利加人であつた。高く飛ぶことを知るものは、風の力に身を任せることをも知つてゐるのだ。あの飛行家が他の飛行を試みるものに殘したといふ言葉は、おそらくあらゆる技藝の祕訣もそこにあらうと思はれるもので、わたしは新聞紙上にその消息の傳へてあつたのを讀み、今だに忘れがたく思つてゐる。その言葉。「なるべく高く飛べ。そして又、なるべく眞直ぐに飛べ。」

（桃の雫）

太平洋横斷　昭和六年秋、米人バングボーン、ハーンドンが、太平洋横斷飛行をしてゐる。

＊自然の征服者

＊懷裡

「風の力に身を任せる」

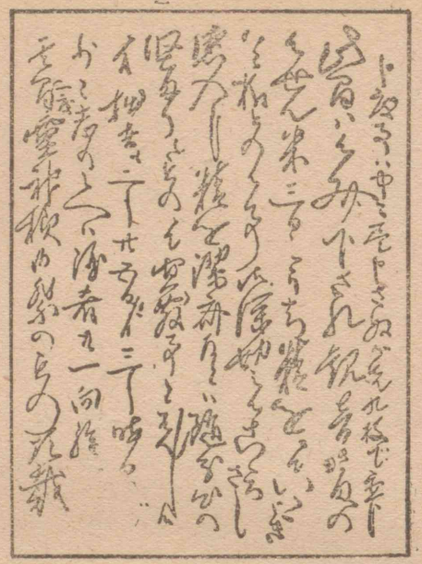
「なるべく高く飛べ。そして又、なるべく眞直ぐに飛べ」

一六 妹に

吉田松陰

この間は御文下され、觀音様の御せん米、三日の精進にて頂き候やうとの御事、御親切の御こゝろざし感じ入り申し候。精進・潔齋などは、隨分心の堅まり候ものにて、宜しき事と存じ候に付、拙者も二月二十五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴など一切斷ち居候。その間一度靈神様御祭の物、頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にあらず、御親切の事に候へば、相はたし度存じ候へども、當所にては當り前の精進の外に、また精進と申し候ひては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね申すべく候に付、それをそれと相こたへ候事面倒に存じ候故、八日はさいはひ精進日なれば、その日一日に頂き申し候。

そもく觀音様信仰せよとの事は、定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申し進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品と申すに觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候はば、繩目にかかり候ひても、忽ちぶつぶつと繩が切れ人屋へ捕はれ候ひても、忽ち錠・鍵が外れ、首の座に直り候ひても、忽ち刀が千々に折るゝなど申してこれ



吉田松陰筆蹟

吉田松陰 諱は矩方、字は義卿、通稱寅次郎。又二十一回猛士と號す。山口縣萩の藩士。慷慨憂國の先覺者。安政六年(一八五九)斬に處せらる。年二十九。

絲 千代。兒玉兵衛門祐之に嫁す。

「御こゝろざし感じ入り申し候」

***御せん米** 安政六年二月二十五日。

二月二十五日

靈神樣 先祖の靈を祀つたもの。

法華經 妙法蓮華經の略。大乘經典の一。釋迦八年間の教を阿難筆者の結集したもの。一部八卷二十八品あり。

普門品 觀世音菩薩普門品。普門とは觀世音菩薩が普く人を佛道に引入れ給ふ門戸をいふ。普門品はこの法を明かにしたもの。

***觀音力**

あり候。之は拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難き事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりながら佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教とさだめこれあり候。小乘にて申し候へば、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すとは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこのことなり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うても、ちつとも頓着なく、縄目も、人屋も、首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に如何に難題・苦患の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・

「大乘」「小乘」

「一心不亂」

*苦患

無道等仕る氣遣はなし。されど、初より凡夫に一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、假に觀音樣を拵へて、人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申し候。

さてまた大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申し候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、吾が身も往く先は老人にならんかと悲しみ、死人を見ては、吾が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生・老・病・死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生・老・病・死、

*方便

「出世法」

天竺王　天竺は印度の古名。天竺王とは迦毘羅衛國の王淨飯王。

を免るゝ修業をしに参られ候。さ候うて、三十出山とて、わづか五年の間に生・老・病・死を免るゝ事を悟り、生まれもせねば、老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて、出で來て、それより世の人を教化せられたり。これが卽ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、卽ちこの世の人を濟度する事に御座候。さて、その死なずと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す御方々は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば、有難がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も、人屋も首の座も、前申す普門品の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。卽ち刀の千々に折れたる證據なり。

*教化
*濟世
孔子　名は丘、字は仲尼。西紀前五五二—四七九。
楠木正成　延元元年（一九六）湊川に戰死年四十三。
大石良雄　元祿十六年（一三六三）自刃、年四十五。

扨又「禍福は繩の如し」といふ事を御悟りあるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種、人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へ共、又一方には學問も出來、己の爲、人の爲、後の世へも殘り、かつ〳〵死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば又如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中には、又福も交り候へ共、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の效驗も無き事に、觀音に賴みて福を求むるやうの事は、必ず無益に存じ候。

されば、拙者の氣遣に觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に、「藥は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。なほ又、一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあ

人間萬事塞翁が馬　人生は禍福常なきをいふ。元の僧熙晦機の詩句。

光　曙

り。兄弟のうちに一人にても否様のわろき人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は、兄弟のかはりにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者のかはりに父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆仲よくなりて、はては父母様の御しあはせ、また子供が見習ひ候はば、子孫の爲、これ程めでたき事はなきにあらずや。よく〳〵御勸辨候うて、小田村、久阪なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をり〳〵御見候へかし。心學本に、

「のどけさよねがひなき身の神まうで。」

神へ願ふよりは、身に行ふがよろしく候。

（俗簡譯）

小田村　松陰の妹壽子の婿、小田村素太郎。

久阪　松陰の妹文子の婿、久阪玄瑞。字は義助。幕末の勤王家。元治元年（一八六四）蛤門の變に斃る、年二十六。

心學本　心學の本。心學は道話ともいふ。

「身に行ふ」

一七　大海の日の出

徳富健次郎

枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過にもやあらん、海上なほほの暗く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うてくすぶりたる樺色の横たはるあり、上りては濃き藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を掛く。光さやかにして、さながら東海を鎭するに似たり。左手に黑く差出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には廻轉燈あり。陸より海にかけて、しきりに白光の環を描きぬ。

徳富健次郎　號は蘆花。文學者。昭和二年歿、年六十。

*撼かす

銚子　千葉縣銚子市。利根川口の南岸に位する。

「黄金の弓を掛く」「東海を鎭する」

犬吠岬　千葉縣海上郡高神村。利根川河口、太平洋に斗出する岬。

「白光の環を描く」

暫くする程に、曉風冷々として青黑き海原を掃ひ來り、夜の衣は東より次第に剝げて、蒼白き「曉」の波を踏みて此方へ此方へと近寄る狀も指點すべく、磯の黑きに濤の白く打懸るさまも漸く明かになり來りぬ。眼を上ぐれば、黃金の弓と見し月は、何時しか白銀の弓と變り、くすぶりて見えし東の空は次第に澄みたる黃色を帶び來りぬ。淼々たる海原に立つ波の、腹は黑うして背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上にさまよへど、東の空はすでに瞳を開きて、太平洋の夜は今明けんとするなり。

已にして曙光は花の開くが如く、圈波の廣まるが如く、空に水に廣がり行きて、水いよ〳〵白く、東の空ます〳〵黃ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、果てはありとも見えずなりぬ。此の時、日の使とも覺しき渡鳥の一列、鳴きつれて海原を掠め

「曉」の波

*淼々

「日の使」

て過ぐれば、大海の波といふ波は悉く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるさゝめき——聲なき聲四方に滿つ。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空に見る見る金光射し來り、忽然として猩紅の一點海端に浮かみ出でぬ。すはや日出でぬと思ふ間もなく、息をもつがせず、瞬く間もなく、海神が手もて擎ぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黃金の櫛となり、金蹄となり、一搖して名殘なく水を離れつ。水を離るゝ其の時遲く、萬斛の金たら〳〵と昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黃金の雪を飛ばしぬ。

（自然と人生）

*聲なき聲

「海神が手」

「黃金の雪」

一八　五百羅漢の畫幅

藤岡作太郎

早くも三四年は過ぎぬ、深川の本誓寺に詣でて、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事ありき。畫は菊池容齋が經營慘澹の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸け列ねて供養し、普ねく有緣の參拜を許す由なれば、友人を誘ひて歩を運びしなり。容齋が執筆の因緣については、哀れなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實はこの歷史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以つて風敎を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしもこれが爲なるべく、又和氣清麿に神號を追贈あらせられしも或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初はこの十年苦心の作

藤岡作太郎　國文學者。文學博士。明治四十三年歿、年四十一。

本誓寺　深川區清澄町にあり。

菊池容齋　諱は武保、通稱は良平。日本畫家。明治十一年歿、年九十。

前賢故實　賢輔、忠臣、烈婦の肖像多數を載せ、各々その小傳を附記せるもの。十卷。

今上陛下　明治天皇。

和氣清麿　稱德・光仁・桓武三天皇に歷事し、延曆十八年（一七九九）歿、年六十七。

も發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく筐底に籠めて、徒に紙魚の棲となるを待つばかりなりしかば、この事あまりに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誠に向ひて、堪へがたき遺憾の情を漏したりき。時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衞といふ商人あり、手の中の球とかしづきし一人の女年頃にもなりしかば、或る方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮のをり持參の衣服調度今はこなたにおきても詮なし、唯歎きの種ぞとて、婿の方より里方に返す、里方には受け取らず、一旦遣はしゝ女の道具は卽ちそなたの物、それを返さるゝは死したるものを離緣するやうにて、草葉の陰にもいかばかり悲しからん、これはそなたへ、いやこなたへと押問答の果、金兵衞は腕拱ぬきて、さらば吾に思案あり、今深川におは

福田行誠　淨土宗の學僧。明治三十八年寂、年八十三。

す行誠上人は淨土宗の大德、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせば、衆生濟度の便ともしたまひて、なき女が往生の緣ともなりぬべしといふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代なし、なほ首尾を合はせて一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、喜ばれよ、御身の志は成りぬ、印刷の料は調へ得たりとあるに、容齋は、涙ぐむまで有難く、脫稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけれ。年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべきと、尋ぬるに、行誠は、善い哉、さらば五百應眞の圖を畫きて供養したまはば、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん、御身の滿足より引いては世間の滿足も、ひとへに世を早うせし乙女の爲、それを悲しむ父母の爲なるをと示す。

それこそ吾にはふさはしき業、いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかりと、沐浴齋戒して書き上げたるが、この本誓寺の什物なりとかや。吾等が參詣せし折も、くさ〳〵の供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍らしく面白き取集めたるがあり。これも近頃愛兒を失ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたり哀れと見たるばかりにて、さして心にも留らず、畫幅の由緒も平たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかかりなど思ふまゝの事を言ひ散らして、さて過ぎにき。今思へば淺はかなりしことかな、昨日は人の身の上、今日はわが身の上など、古めかしき言ひぐさながら、今こそひし〳〵と心の底に染みぬれ。

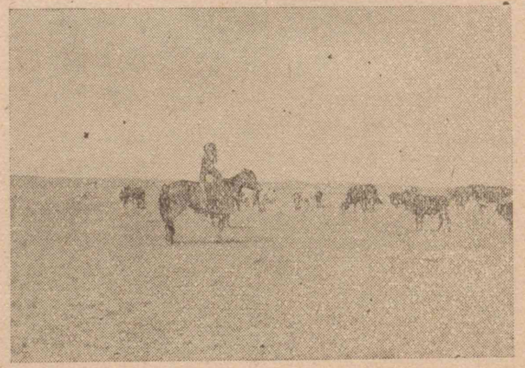
（國文學史講話）

一九 滿蒙の四季

上田恭輔

「滿蒙」と言ふと、多くの人が一望千里の大平原を想像する。しかし現に我が關東州租借地の如きは、遼東半島の尖端にある僅かに百二十餘方哩の岩だらけの土地なので、海岸にだけ多少の平地があるのみである。右のやうに、奉天以南の遼東半島は、千山山脈が二重にも三重にも北から南に走り、武藏野ほどの平地さへない。しかし奉天以北になると、遙か東に長白山系を雲か山かと認めるだけで、これこそ一望千里、一物の視界を遮るものもないのみならず、更に洮南以西の地、或は海拉爾地方、或は黑河の平原に立つと、將に天地は一眸の内にあつて、その偉大なる壯觀は、何とも形容すべき言葉もない。「揚子江の大を見ないものは、支那を知らないものだ。」と言ふが、それよりも、「滿蒙の平原を見ないものは、大陸の何たるを解しないものだ。」と言はなければならない。

滿蒙の冬の天地は、山川草木あらゆるものが結氷する。その間が凡そ五箇月。日本でならば常磐の綠に誇る松柏も凍えて黃色になる。だから、冬期の滿蒙は、滿目荒涼一點の綠色を見ず。西を見ても東を眺めても、雪と氷であり、畑も五六尺の深さまで岩石の如くに固くなる。ダイナマイトでも使用しないと、容易に穴が掘れな



滿蒙の平原

上田恭輔　ドクトル フィロソフィ。滿蒙研究家。

「大平原」

*關東州租借地　遼東半島下ノ關條約（明治二十八年七月十四日）に割譲を受けたるもの、清國よりの三國干渉に沙汰ポツダムの條約に返還し、我が現在の租借地を關東州と名づけ、遼東半島の南端を奉天省の一部とす。

奉天　滿洲第一の都。南滿線・奉天吉林線・奉天安奉線の分岐點。

洮南　黑龍江省の南西部の開市場。興安北省に近き一帶。

海拉爾　興安北省西境に近き一帶。ハイラルに沿ひ開市場あり。

黑河　黑龍江省の東方に沿ひ境。黑河イラルに沿ひ一帶。

「偉大なる壯觀」

揚子江　源はチベット高原、黃海に注ぐ。全長五二〇〇粁、世界第五位の大河。長江又大江ともいふ。

「冬」

「雪と氷」

い。雪は砂糖のやうに細かく、一度降ると翌年五月までは解けず、河や湖や沼の氷は、その上に枕木を並べて鐵道を架け、汽車を駛らせても大丈夫である。日本人の小學校の校庭には必ずスケート競技場があり、零下二十何度の酷寒の夜でも、煌煌たる電燈の下でアイス-ホッケーに耽る青年男女が澤山ある。

滿蒙幾萬方哩の地も、先年までは、鐵道の外には路らしき街道もなく、牛馬車輛を通ずる橋一つさへなかつた。そこで結氷期を待つて交道運搬の活躍が始まる。何千萬噸と稱する大豆その他の穀類が、或は橇、或は八頭曳の荷馬車によつて、北から南へと運ばれる。湖水の上でも、大河の上でも、個人の畑の上でも、勝手次第に住來する。それは盛んなものだ。

アイス-ホッケー　氷上で行はれる競技。十八世紀頃イギリスで行はれたのが始。

松花江・遼河、及び鴨綠江を滑る橇の輸送に至つては、確に滿洲獨特の運搬法である。松花江の如く、何百哩とある長い河の上を辷つて特產物を輸送する荷馬車隊のためには、二十哩か三十哩毎に、臨時の宿屋が氷の上に開設される。暖國人の想像もつかない事柄であらう。

松花江氷上の馬宿

日本の春の魁は、梅の花と鶯の初音である。滿洲では黃塵萬丈が起つて、始めて地上の氷や雪が解け、春の日の將に近きを知る。支那では「白髮三千丈。」などと誇張の言葉があるが、滿蒙

松花江　興安嶺に發し、西北流して更に北東に走り黑龍江に注ぐ。

遼河　興安嶺に發し、遼東灣に注ぐ。河口に營口あり。

鴨綠江　長白山脈に發し、滿洲と我が朝鮮との國境を南西流して黃海に入る。

「春」

「黃塵萬丈」

＊白髮三千丈

の黄塵だけは、萬丈は愚か、青天白日にしてなほ天地晦冥、一米前も見えず、晝の日中に電燈をつけることさへある。この黄塵萬丈に乘じて、明治三十八年三月十日、皇軍は露軍を追擊し、奉天城を占領した。この黄塵は玄海灘を越えて、遙か九州地方、或は宇都宮地方の空を掩うたことさへもあるから、驚かざるを得ないではないか。

四月の中旬になると、突如一夜にして地上に綠草が萌出で、次いで堇や蒲公英が咲く、土筆が芽を出す。同時に楊柳の枝が青くなる。「柳絮春雪を飄して荷珠水銀を漾はす」とは、梁の元帝の名吟として後世に傳はつてゐるが、楊柳の花の翩々として四散し、地に積つて雪かと思はれる美しい風景は、滿洲でないと見られない。

*晦冥

玄海灘 又玄界灘。福岡縣北方の大島及び沖島と壹岐との間の海上。

梁の元帝 名は繹。支那六朝時代の梁の皇帝。西紀五五四年歿。

梅は盆栽以外にはない。春の魁に咲く花は、杏と李である。梅花より濃艶であるが、惜しいかな馥郁たる梅花の香を缺く。李・杏の花の散らない間に、梨・林檎、次は櫻、最後は桃と、百花爛漫、草も木も一時に花が開く。

殊に美しいのは、藤と胡藤の花盛である。胡藤と言ふのは、アカシヤを詩的に和譯した名前で、僞槐（にせゑんじゅ）のことである。五月の初旬に滿開となる。花には純白があり、淡紅があり、又淡青があり、ゴールデン・チェーンと言つて黄金色のものもある。初は露西亞人が滿洲に移植したもので、旅順や大連の街路の並木に多い。櫻と藤は、大和男子が母國を偲ぶために、第二の故郷へ日本から輸入した、懷かしい憧れの花である。この他石榴・牡丹・芍藥、野生のライラックなどの美しさに至つては、日

「百花爛漫」

アカシヤ 豆科の喬木又は灌木で、街路樹として用ひらる。

ライラック 紫丁香花。（むらさきはしどい）。

本の花も、到底及ばないほどの艶麗さを見せてゐる。滿洲は決して荒地ではない。

かくて南滿洲の春は、昨日まで氷に鎖された天地が、俄然として百花爛漫、あらゆる禽鳥の囀る光景に一變する。鶯も、雲雀も、杜鵑も、何もかもけたゝましく囀り、恰も小鳥屋の前に佇むやうな感じがする。

北滿になると、春も秋もない。冬から夏へ、夏から冬へ一足跳びである。松葉牡丹が、地上に絨緞の如くに彩られ、玫瑰と呼ぶ紅白の野薔薇が、垣根に新裝を粧ひ、野に勿忘草や、茜草や、僅かに三

滿洲の春

「夏」

茜草　茜科。山野に生ずる蔓生の多年生草本。秋黃色の花を開く。

哈爾賓　濱江省中央部の都邑。松花江の右岸に沿ひ、一に濱江と呼び、濱北線・溪洲線・濱綏線等の分岐點。

四寸の豆燕子花などが咲亂れる頃は、早くも夏である。哈爾賓から北滿鐵道の沿線へかけては、漸く新綠になつたかと思ふと、五月の中旬には、既に氣溫が華氏の九十度近くに昇り、毛衣を捨てるや否や、一躍して白服に白靴の世界と變る。

何と言つても滿洲の新綠は美しい。氣候の乾燥するせゐであらう、各種の楊柳・樺・楡はもとより、蘇生した松柏の葉までが、鶯の羽のやうに美しい挽茶色に彩られる。洋畫家の憧れるのも決して無理はない。

暑氣の盛んな頃になつて、華氏百度以上の高溫に昇ると、汗はどし〳〵蒸發して、身に纏ふ衣のびしよ濡れになると言ふやうなことはなく、皮膚もさら〳〵して粘り著かない。だが、日光の直射は、焦げつくばかりに强烈である。

「新綠」

夏の朝は、四時の時計の音を聽くと、東の空が早くも白む。そして夜は八時近くまで明かるい。星が近く大きく見える夜の空は、そのすが〳〵しさと、大空に濕氣がないのとで、天は恰も青磁色をなしてゐる。六千年の昔に、メソポタミヤで天文學の發達した理由が、滿蒙の夏の夜の大空を眺めて、いかにもと理解される。

遠く海を離れてゐる大陸の氣候は、日本人には思ひもよらない變化が多い。たとへば、北滿地方では、日中は百度にも近い酷暑の夏の夜が、眞夜中の二時になると、毛皮の外套を羽織つてそれでも震へるほどの寒さに冷えることもある。また地に置く露の夥しきことを見ては、雨降らぬ蒙古の沙漠に雜草の繁茂する理由も成程と頷かれる。

メソポタミヤ　太古の文明國。ナイル河畔のエヂプトと共に、世界史上人類の最初に國家的生活を營みし地。「天文學の發達した理由」

一年に一回、七月の下旬から八月の中旬まで、ちやうど一箇月ほど雨が續く。日本の入梅のやうに、連日びしよ〳〵降るのではない。豪雨とはかゝる雨を言ふのかと思はれるほど、勇壯極りなく、恰も空一面の大きい盥の水を、一度にひつくり返したやうな勢で落ちるのである。息づく隙もないくらゐの大降雨で、市中の道路は忽ち河と化し、渾河・太子河のやうな巨大な河も一時に氾濫する。滿洲で、平常は一滴の水さへも見ない砂原の河床の上に、長い〳〵鐵橋が架けてあるのは、このためである。

だが、幸ひにかゝる豪雨も二日とは續かない。忽ち降り忽ち青天白日となる。まことに男らしい雨である。我が關東州租借地では、右の一年一回の雨を一滴も逃すまいと、各處の

「雨」

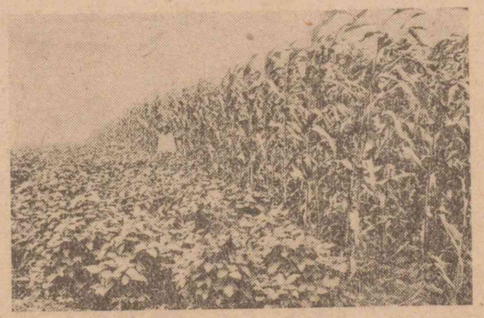
渾河　長白山脈に發し、撫順の北、奉天の南を經て、太子河と合して遼河に注ぐ。

太子河　長白山脈に發し、本溪湖より西流して遼陽を南に經て、渾河と合して遼河に注ぐ。

＊青天白日

山間溪谷に大規模の堰堤を築造して、幾つとなく貯水池を設けてゐるが、既に百萬の人口を裕に支へるだけの上水の設備が成つて居る。

四季を通じて、滿洲の秋は最上の好季節である。春のやうに黃塵萬丈の苦しみもなく、事實に於て天は高く馬は肥え、大空には一點の白雲を見ず、中秋の滿月を賞するには持つて來いの上天氣が續く。



「秋」　秋ゐる　稔

だが惜しいかな、その良季の秋の日はまことに短い。北滿洲に行くと、秋は僅かに二週間ぐらゐで、忽ち煖爐に親しむ世の中となる。しかし、朝鮮に近い安奉線沿道の深山溪谷の秋

「中秋の滿月」

の紅葉は、燃ゆる火焰のやうに美しい。萩は秋木と呼ぶやうに、床柱になるくらゐの大木もある。女郎花も人間の背丈ぐらゐに高い。桔梗、撫子の花の濃艶華麗に至つては、到底濕つぽい日本の花の比ではないと思はれる。

かゝる秋草の美も、草むらに啼くあらゆる蟲の美音も、それを樂しむは日本人だけで、實利本位の滿洲の人はあまり顧みない。彼等は、蟬が鳴きやみ蟋蟀が合奏を始めると、早速に農作物の收穫の用意に取りかゝるのである。

（新滿洲國寫眞大觀）

人の眼に入る一切の美と意味とは、自然のうちに有するにはあらで、全くわがうちに有するのである。（エマスン）

「秋草の美」

二〇 誠の說

三浦梅園

一勺の水を海に入れて、海の水增したりといはんは愚なり。增さずといふも妄なり。水を加ふる所は我にして、增すと增さざるとは我にあらず。我にあらざるものは强ひて其の辨を求めずして可なり。我にある所の誠を盡くす、これ君子の道なり。誠とはうそを言はざる事とのみ心得たらんは、愚なることなり。或人「司馬溫公に誠に入る方を問ひければ、「妄語せざるより入る。」とぞ答へける。成程妄に語らず、うそを言はぬより誠の道には入るなれども、虛言を言はぬを誠とは言はぬなり。僞を言はぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さきものなり。

三浦梅園 名は晉。字は安貞。德川中期の儒者。寬政元年(一七八九)歿、年六十七。

「君子の道」

或人……「劉安世光ニ一言以テ終身之ヲ行フ者ヲ問フ。光曰ク其レ誠乎。安世其ノ從リテ入ル所ヲ問フ。曰ク妄語セザルヨリ入ルト。」(宋鑑)

司馬溫公 名は光。字は君實。支那宋代の學者。(西紀一〇一九—一〇八六)。

地に落さば目にもかゝらぬやうなれども、內に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隱すべからず、味ますべからず、覆ふべからず。其の時至るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。其の子を水に腐らし火に燒きて、芽を出さずといふは、その子の咎ならんや。是によりて物の子を實といふ。實は卽ち誠なり。少しにても誠ならざるもの交りて、腐りたるものは芽生ぜず、痛みたるは苗瘁く。人の誠も猶斯くの如し。

昔、衞の靈公といひし君、夜、夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。靈公、「誰なるべきか。」と、南子に問ひ給ひければ、「是は蘧伯玉なるべし。禮に『下ニ公門一式ニ路馬一。』といふことあり。

「內に一つの誠といふものありて……實を結ぶ」

衞 支那の春秋戰國時代における十四列國の一。

禮 禮記(ライキ)。周代の禮書。

『忠臣孝子、不爲昭々信節、不爲冥々惰行。』といへり。蘧伯玉は衞の賢人なり。夜なればとて禮をば廢てじ。」と言ひけり。靈公、人をつかはして見しめけるに、果して伯玉にてぞありける。

人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る。いかでか掩ひかくすべき。たとへば一升の米日々に二三十粒を取らんとも、措かんとも、知れざるべし。然れども久しく措くときは增し、取る時は減る。草木も朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠といふものは少しの間斷なき故に、いつ太るともなけれども次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもす

「伯玉にてぞありける」

四知 後漢の楊震の言。

「次第に太るものなり」

まじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、うつくしく照ればこそ、人至りたる時も香清く色麗しけれ。人の至るを待ちて香を放ち色を出さんとせば、苦にあふことあるべからず。常々心に掛けて掃灑したらん座席と、俄に蜘蛛のい取り柱拭きたらんとは、いかでか見紛ふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み僞り文らんは、誠の俄掃除なるべし。「如見其肺肝。」とて、人を欺くにあらず、たゞ我が心を欺くに過ぎざるなり。

なき名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はば
いかゞこたへん

此の歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を省みて、「いかに今の如く誠ならざることをばせしぞ、言ひしぞ。人をば欺か

「人を欺くにあらず」

如見其肺肝 大學の傳(朱熹註)に、「小人閒居シテ不善ヲ爲シ至ラザル所無シ。君子ヲ見テ後厭然トシテ其ノ不善ヲ揜テ其ノ善ヲ著ハス。人ノ己ヲ視ルコト其ノ肺肝ヲ見ル如ク然リ。則チ何ゾ益ナラン」

なき名ぞと…… 後撰集、讀人知らずの歌。

んとて、などて自らの心を自らは欺ける。」と咎めたらんには、自ら恥づかしくなり、獨りゐても顏より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審蒙りし時、「僞なき旨を起請を以て申し上ぐべし。」とありければ、「我一生僞を言ひしことなし。僞なしと申す上は、此のことに限りて起請を書くまじ。」とて、終に書かざりしこそ勝れていみじく聞ゆれ。人には我意といふものありて、一旦我が言出しし詞は、たとひ惡しと案じ當りても、是非に言募りて我を立つるものなり。これ腐りたる實の如し。實といふものを失ひたるなり。尋常のもの此の意あれば、人に憎み疎んぜられ、人の主人となり、探題奉行・頭人なんど此の意あれば、人をやぶり國をそこなふ。

（梅園叢書）

畠山重忠 源頼朝の臣。將軍實朝の時、北條氏の讒により幕兵に襲はれて自刃す、年四十二。

鎌倉殿 源頼朝。

「實といふものを失ひたるなり」

二 夜叉王

岡本綺堂

人 面作師 夜叉王　源左金吾頼家

夜叉王娘 桂　下田五郎景安

同 楓　修禪寺の僧

時 元久元年七月十八日。

處 伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畑を隔てて塔の峰つゞきの山、又は丘など見ゆ。二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

岡本綺堂 名は敬二。劇作家。和昭十四年歿、年六十八。

元久元年 土御門天皇の御代。（一八〇四）。

二重家體 舞臺用語。緣側などに見せるために、平舞臺の上に、一段高くしつらへたるもの。

上手・下手 見物席より向つて右を上手、左を下手といふ。

楓門に立ちて人を見送る體、そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(二十三歳)、跡より下田五郎景安(十七、八歳)、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵將軍家の御微行ぢや、粗相があつてはなりませぬぞ。

楓　はつと平伏す。頼家主從進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉　思ひも寄らぬ御成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家　は緣に腰を掛ける。

夜叉　して御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れ

*御微行

「問はずとも大方は察して居らう」

と、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず、幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも、百日、とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家　予は生まれ付いての性急ぢや。待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の

*出來

*延引

「仔細をいへ、仔細を申せ」

面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一つも無く、更に打替へ、作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。其の申し譯は聞きあいたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　其の期日は申し上げられません。左に鑿を持ち、右に槌

夜叉王（劇）

*等閑

を持てば、面は容易く成るものと思召すか。家を造り、塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、始めて面も作られまする。但し其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年・二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿、上樣御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事ばかり申し上げたら、御癖が愈募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　梵語。「勇健」の義、鬼神の類。

羅刹　梵語。人を食ふ魔。

三島の社　静岡縣田方郡三島町にあり、事代主神を祀る。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはのう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは如何にも無念ぢや。

賴家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には……。

賴家　むゝ、おのれ覺悟せい。

「何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう」

「それ故に出來ぬといふのぢや」

痛癖募りし賴家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出づ。

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け、退け。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。のう父樣。

夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

賴家　えゝおのれ、前後不揃の事を申し立てて予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、虛僞ではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父樣、もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんに然うぢや。昨夜、漸く出來したといふ彼の面を寧

「まあ〳〵お待ち下さりませ」

そ獻上なされては……。

僧　それがよい、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓　あい〳〵。

楓は細工場へ走り入りて木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂は受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家は無言にて少しく解けたる體なり。

「命が惜しいか、名が惜しいか。……默つておゐやれ」

桂　虚僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげる。

賴家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣御顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。

飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。

はゝゝ。

夜叉王形を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もございません。方々には其

の面を何と御覽なされまする。

頼家 さすがは夜叉王、天晴のものぢや。頼家も滿足したぞ。

夜叉 天晴との御賞美は憚りながらお鑑識違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎 面が死んで居るとは……。

夜叉 年來數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色なく、魂魄も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる

*鑑識

人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉 いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりません。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈・怪異なんどの類……。

僧 あ、これ〳〵、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重畳。あり難く御禮を申されい。

頼家 むゝ、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持歸るぞ。

夜叉 たつて御所望とござりますれば……。

頼家 おゝ、所望ぢや。それ、

頼家は顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

*怨靈 *怪異 *重畳

僧　やれ〳〵、これで愚僧も安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家　おゝ何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に燈籠を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はじつと思案の體。（綺堂戯曲全集）

「頼家行きかゝりて物に躓く」

藝術は長し生命は短し。（ローマ古諺）

高尚なる藝術は一個の偉大なる心靈の表現に外ならず、而して偉大なる心靈は甚だ稀なり。（ラスキン）

ラスキン（1819—1900）、イギリスの文學者・藝術批評家。

三　國民的理想

大西祝

世界の文明は、これを全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し發達す。而して各國歴史の河流は遲速の別こそあれ、遂には世界歴史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。ただその世界の文明に力を致すに於て、各國必ずしもその趣を一にせず。往昔、猶太人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、希臘人は文藝・學術を傳播するを以てその天職とせり。羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉に於て、なほ世界の帝王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建てて精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。近世の歐米人を見るに、英人はおのが運

大西祝　評論家。文學博士。操山と號す。明治三十二年歿、年三十六。

*朝宗

*天職

*精神的帝王

命は海上權を掌握し、遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主・自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學及び政治の上より世界に一大寄與をなすを以てその抱負とし、佛人は人間的の思想・感情を世界に弘むるを以てその任務とするがごとし。

日本は世界の文明に對し、如何なる寄與をなすべきか。日本國民は世界に對して如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者・先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大勢は日本人をして如何なる事を世界に宣傳せしめんとするか大勢は無聲・無形なり。識者・先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ、形あらしめざるべからず。もし偉大なる先覺ありて、この大勢が言はんと欲して言ふ能はざるところを國民

*海上權

「無聲・無形」
*悟了

に宣傳するあらんか、國民の心は、譬へば塞がれたる水の堰を開かれたる如く、滔々たる大河となりてその進むべき所に流れ行かん。我が輩は一日千秋の思をなして、日本國人將來の覺悟・抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。

然れども、我が輩姑く明治維新時代に立返り、當時の經世憂國の士が自ら任じたる所を見るときは、その中なほ我が國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばあらず。彼等は大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り、至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁に天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を說破し、討伐し、剿誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。

*大義名分
*權謀術數
*一視同仁
*横道
*剿誅

その元氣の壯なる、人をして覺えず奮起せしむるものあり。この元氣とこの覺悟とありしが故に、維新の改革は成就して、鎖港攘夷の陋見を打破せられたるなり。維新以來日本が駸駸として進歩し、今日の如く多少の力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。

我が輩は日本に種々の缺點あるを知る。日本人はなほ幾分の修錬と困難とを經過せざれば、決して大國民となる能はざるを知る。然れども世界中に於て大義名分のために熱狂し、忠誠のために一身を抛つこと土芥も啻ならざる民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極或は輕卒の擧動に出で、大事を誤る同胞なきを必せずといへども、身を殺して仁を成すに於て極めて敏速に、死して

*陋見
*駸々
「大國民」
身を殺して云々　論語衛靈公篇に、「子曰ク、志士仁人ハ生ヲ求メテ以テ仁ヲ害スル無シ、身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成スコト有リ。」

悔なきもの、日本人のごときは世界國民中多くあらざるところなり。日本人は道德・義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。果して然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは道德上の教訓にあらざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私欲の氾濫を排除する一大任務を有し居るにはあらざるか。日本帝國が開闢以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔・美麗なる風土山川に薫化せられ、君臣・父子・夫婦・朋友の道正しく、大體上よりいへば殆ど理想的國家を經營し來りたるもの、他日大いに世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨する

*沸騰
*師表
「理想的國家」
*掃蕩
*扶持誘掖
*掣肘
「道德上の帝王」

は、日本がその特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與にあらざるか。

我が輩は日本が天地大道の化身となりて、萬國民を警醒する大抱負・大覺悟をなすべき時機到來せるを見て、欣喜措く能はざるものなり。

（大西博士全集）

「天地大道の化身」

——〔終〕——

漢字異同辨

同訓の爲に誤用し又は解釋を過る文字を集めた一覽表である。詳しくは辭書に就いて研究し、常にこれを用ひて習熟せられることを望む。

（ア）

- 嗚呼（アヽ）　よき事にも、わろきことにも用ふ。
- 噫（アヽ）　哀傷痛恨又は不平の聲。
- 飽（アク）　腹一ぱいに食ふ。あき足りていやになる。
- 揚（アガル）　とびあがる。高くあげる。「飛揚」
- 擧（アク）　措と對す。下にあるものをあぐ。「擧手」
- 昂（アタル）　意氣揚々たるさま「昂然」氣があがること。「激昂」
- 當（アタル）　彼と我とぺつたりとあたりあふ。「相當」「適當」「正當」まさにとも訓み、方今と熟す、今を盛りになり。「此時に方り」
- 中（アツ）　矢の的にあたること。轉じて廣く的中する義。百發百中。
- 預（アツカ）　本來は參與する意今は多く物品をあづかる意に用ふ。その事に立ちまじはる「參與」「干與」
- 與（アツカ）　アヅクとはよまず
- 厚（アツ）　薄と對す。輕薄ならず。「溫厚」
- 篤（アツ）　心を用ふることあつし。「篤實」
- 淳（アツ）　風俗性質などの厚くして、まざりなきこと。「淳樸」
- 憐（アハレ）　かはゆく思ふ。「可憐」
- 憫（アハレ）　ふびんに思ふ。「憫然」
- 合（アフ）　物の一つになること。アハスともよむ。期せずして出でふ。

（ア）

- 遭（アヒ）　兩方より行きあふ。
- 會（アヒ）　「會合」「會議」
- 誤（アヤマル）　氣づかずして仕損ず。「誤字」「誤解」
- 謬（アヤマル）　すぢみちの違ひ。「謬見」
- 過（アヤマツ）　氣づかずに犯す。「過失」
- 改（アラタム）　ものをしなほす。「改正」
- 悛（アラタマル）　心をなほす「悔悛」
- 革（アラタム）　根本よりかへる。「革命」「改革」
- 更（アラタム）　改と略す同じ「變更」「更新」
- 見（アラハル）　かくれたるものが出てくる。
- 現（アラハル）　見と義同じ。
- 顯（アラハル）　かゞやく程にあらはる。「顯彰」
- 著（アラハル）　いちじるしとも訓む。「著名」
- 表（アラハル）　うはがはへ出してみゆるやうにす。「表明」「表示」
- 露（アラハル）　むきだしにする。暴露。「露出」
- 有（アリ）　物のあること。「有無」と對用す。
- 在（アリ）　その處にあること「存在」ニアリ。

（イ）

- 怒（イカル）　いかり外にあらはる。
- 恚（イカル）　心にいま〳〵しく思ふ。
- 憤（イカル）　心にむつとすること。
- 息（イキ）　安氣にやすむこと
- 憩（イコフ）　小やすみをすること。
- 抱（イダク）　かゝへもつこと。
- 懷（イダク）　ふところに入るゝこと。
- 痛（イタム）　いたみを覺ゆ。
- 疼（イタム）　いたみの始終やまぬこと。
- 傷（イタム）　いたみきずつく。
- 悼（イタム）　なげかはしく思ふ
- 至（イタル）　そこまで行きつくこと。「至極の義」
- 到（イタル）　彼より此に到着する意。
- 詣（イタル）　往くなり。進むなり。
- 僞（イツハリ）　いつはりこしらへる。人爲にて、天眞にあらざるなり
- 詐（イツハリ）　欺きだますこと。詐僞と連用す。
- 寢（イネ）　寢に就くこと。
- 寐（イネ）　れいること。人の言を直ちにうつすとき用ふ。イハク。
- 曰（イハク）　日と略す同義。文の終に置くときは「と申すことであります」の意。
- 云（イフ）　心に思ふ所を口にのぶること。言と同義のことあり。批評の義となることあり。イハレとも訓む。
- 言（イフ）　謂と同義のことあり。

イ　ムシマイ　戒　前より注意してよく守らしむること。戒と略ス同じ。用心さすること。いましめのことば。

イ　シヤイ　卑　賤　貴の對照語。

イ　ル　入　納　出の對照語「出入」「出納」だし入れ。他動にのみ用ふ。納は「納受」などと連用し受入るゝを主としていひ、入は入るゝものを主としていふ。

（ウ）

ウ　容　包みいるゝこと。他動にのみ用ふ。

ウ　カバフ　伺　窺　受　わがものになる。ひそかに樣子をはかる。のぞくこと。ものを手にうけとる。

ウ　得　獲　「利得」獵してうるなり。「捕獲」

ウ　承　下より上のものをうくること。天又は上の命をうくること。

ク　稟　襲・享　二字同義。御受納下さる。「尙はくは享けよ」

ウ　ツ　擊　手或は物にてつよくたゝく。

ウ　打　擊と同義に用ひることあり。「毆打」又、接頭語にも用ふ。

ウ　拍　手のひらなどをうつ。

ツ　毆　杖にて人をたゝく

ツ　撲　小擊なり。

ウ　討　罪をいひたてうつ。

ウ　伐・征　上より下の罪をとがめうつ。

ウ　移　處をかふること。「移住」「移轉」

ス　寫　ものをかきうつす「寫生」

ツ　摹　物の形を似ることと。「摹倣」

ス　描　畫をうつすこと。ゑがく。

ウ　奪　與の對照語。引きたくり取る。

フ　バ　簒　下より上のものをうばひとる。「位を簒ふ」

ウ　ムラ　褫　はぎとる。

ウ　怨・恨　人をうらみ、あだとすること。

ウ　憾　のこりをしく思ふ「遺憾」

ウ　ホル　濕　しめること。乾の對照語。

ウ　潤　ウルホス　水分を含むこと。つやのあること。

ウ　濡・沾　水のかゝりてしつぽりとぬるゝこと。

フ　憂　心の中にあんずること。難義なること。わづらふこと。

フ　患　ものさびしく思ふこと。ふびんに思ふことめぐむとも訓む。

フ　愁

フ　恤

（エ）

エ　選　よりすぐること。「選擧」こしらふること。「撰述」よしあしをよりわくること。「擇言」

ル　クオ　送　行くを送る。又は物を運送する。人に物を與ふること。

（オ）

オ　贈

オ　ル　奢　儉の對照語。華美を好むこと。

オ　ル　驕　謙の對照語。高ぶること。

ル　傲　人を輕んずること約の對照語。張大にするなり。

オ　ス　推　上より押しつける。わきよりおす。

オ　ル　押・壓　心にきづかふ。おそらくはともに訓む

ソ　恐　甚しくおそる。

ル　懼　おぢおそる。あとよりおひかくること。

オ　追　おひはらふこと。上よりかぶせかけること。

オ　フ　逐　おひはらふこと。ふたをすること。おほひかくすこと。さへぎりかくすこと。

オ　ホ　覆

フ　ホ　掩　蔽　蓋

（カ）

フ　モオ　思　思案すること。想　形相を心に思ひうかぶること。

フ　惟　只一すぢに思ふ。

フ　顧　心にかへりみ思ふ

カ　掛　ひつかける。ひきかゝる。よせかける。

カ　懸　つりさげる。つりさがる。

ク　係　つながる。「關係」

ク　羅　あみにかゝる。病にかゝる。

カ　隱　カクス　顯の對照語。外へあらはれぬこと。

カ　匿　人に知らせぬやうにすること「匿名」

カ　竄　にげまはりてかくるゝこと。

ク　藏　貯へおく。カクスとのみ訓む。

カ　影　陽の對照語。ものかげになること。

ゲ　陰　陰と同じ。されど陽には對せず。

ゲ　蔭　蔭のたゝぬやうな

カ　シタ　固　硬　る意。かたまりて動かぬこはくて、しんがある。

カ　ツ　勝　負の對照語。勢すぐれたること。廣く用ふ。

カ　ナカ　克　捷　勝ちがたきにかつ軍にかつ。

カ　フ　適　稱　宜しきを得。つりあふ。

カ　ハ　變　カフル　常の對照語。うつりかはる。

カ　ル　代　名代になる。彼と此と交換すること。

カ　ル　換　とりかふる。ふりかはる。

カ　ル　易　うしろをふりかへりみること。心のうちにみかへる。

カ　ヘ　顧　出でたる所へたちかへりおちつくこと。

カ　ル　歸　往き先よりめぐりかへること。往に對す。

カ　ヘ　還　二度もとの道をかへる。

カ　ル　復

（キ）

キ　シラ　辛　「辛辣」いら〳〵する。「苛酷」

カ　ル　苛　生氣のなくなること。

カ　ル　枯　水のなくなることかりすてる。

カ　ル　潤　かりとる。

カ　ル　莠　はしやぐこと。潤の對照語。

カ　ル　刈　干物になること。濕の對照語。

カ　ワ　燥　のどのかわくこと。

カ　ク　乾

カ　ク　渴

キ　ク　聽　注意して聞く。きこゆとも訓む。先方の聲の耳に入ること。

キ　ズ　創　きりきず。怪我。損じ。

キ　ズ　傷　あざのごとききず

キ　ル　極　ルキヘマ　至極の義。行き屆きて最早其の先なきなり。

キ　ム　究　推尋なり。きはめつくすなり。

ハ　窮　行きつまる。

キ　ル　斬　切　きりきざむこと。きりはなすこと。

キ　ル　截　斷　はさみきること。寸斷にすること。

キ　ル　伐　きりたふすこと。

（ク）

ク　ダク　碎　摧　石などの細かにくだくること。竹木などのくだけひしぐること。

ク　シ　精　委　細密精密。垢ぬけしたること。委曲。つぶさに。

ク　シ　汲　水をくむこと。

ク　ム　酌　酒をくみだすこと。

ク　ム　掛　「掛酌」ほどよくとりはからふ。

ク　ル　苦　困　辛苦の義。なんぎすること。

（ケ）

ケ　ス　汚　濁水流れざる意より、きたなきことなる。

ケ　ガル　穢　ケガス　草だらけに、きたなき意。

ケ　ス　漬　心やすだてに、無禮に流るゝこと。

（コ）

コ　トゴ　悉　盡　逐一。詳悉。いつたいに。のこらず。

コ　ク　殊　きれはなれてちがふ。殊に美なり。別して。とりわけてひとりすぐるゝなり。格別。

コ　ト　特　異同の對照語。彼と此とちがふ。

コ　ニ　希　冀　物事のできるやうに、れがひのぞむ。

コ　ヒネガフ　尙　どうぞ。なにとぞ「尙はくは饗けよ」

コ　ヒ　庶幾　どうぞ。チカシとも訓む。

コ　フ　請　まことを以てれがひもとむ。

コ　ヒ　乞　れだりもとむ。

コ　エ　越　踰　界をこゆる義。彼に對す。「此處」「此時」指す

コ　エ　超　所狹くして切なり

コ　ル　此　汎くして切ならず

レ　之　是　上又は下にある事物の代名詞。（句頭に用ふるとなし）此と略ス同じけれども、彼に對せず。「斯道」

レ　ル　斯

ロ　コ　殺　いのちをとる。

ロ　ス　誅　罪あるものをころす。

ロ　ス　戮　みせしめにころす

ロ　ス　獄　尊長の人をころす

（サ）

サ　フカ　逆　順の對照語。

サ　フカ　忤　にさからふ。

サ　カリ　盛　サカンナリ　衰の對照語。

サ　カリ　昌　繁昌。

サ　クリ　裂　ひきさく。

サ　クリ　割　きりわける。

サ　クリ　劈　斧にてうちわる。ツンザクと訓む。

サ　シハ　挿　ハサム　さしこむ。

サ　シハ　挾　物を兩方よりはさむ。こわきにかいこむ。

サ　ムサ　覺　目のさめたる如く明かになる。わが心の迷がひら

ムサ

覺 目のさむること。「夢覺む」

醒 酒のさむること。

寤 目のあきてをること。「寤寐」

サ

去 來の對照語。その場をたちのく。

遠 くひちがうてはなれる。

ルサ

距 里程年月などのへだたること。

ツサグ

騷 さわぎみだれる。

躁 靜の對照語。せわしきこと。

噪・譟 口々にやかましくいふこと。

（シ）

シキリニ

頻 おひかけおひかけ「頻繁」

切 しみ〳〵と。切に思ふ。

シタガフ

順 つゞけて。逆の對。そのとほりでさからはぬこと。

連 逆の對。つきてゆく。

從 從行の義。まにまに。

循 したがひ奉ずる、まもる。

遵 したがひ奉ずる、まもる。

シカヅ

靜 動又は躁の對。

閑 忙の對。

徐 疾の對。ゆるやかそろそろ。

舒 迫の對。のびのびと。

シバク

暫 久の對。

クラ

且 まあちよつと。

退 進の對。あとへさがる。

クソリシ

斥 排斥。はらひのける。

黜 官位を貶し下げる。

擯 擯斥。なかまはづれ。

ルシ

知・識 知は識より意重し。

（ス）

スクナ

少 多の對。

寡 衆の對。

シナク

鮮 尠 極めて少きなり。

フクス

救 ひきふせて助くるなり。

援 たすけまもる。

ムス

濟 わたりかぬる所をわたしすくふ。世を濟ふ。

進 自動詞にも、他動詞にも用ふ。退の對。

勸 他動詞にのみ用ふ「勸誘す」

薦 神に物を奉ること轉じて人に物を進上するにも、人才を推擧するにも用ふ。これも他動詞のみ。

奬 ほめあげて勵ますこれも他動詞のみ

ツス

捨 取の對。とりあげぬ。

棄 うつちやる。「放棄」

ニデス

既・已 現在完了。過去。

則 ……なるときは。……なれば。即時。すぐに。そのなりで。そこで。

チナスハ

即 すまひとする「住居」かりにすむこと。

乃

ムス

棲 住

（セ）

「鳥は木に棲む」

ムセ

攻 城を攻む。轉じて過去をとがむるの意ともなる。罪をせめとがむるなり。

責 ことばの上にてしかりとがむること

讎

ルシソ

誹 人の非をさしでそしること。

謗 かげ口をいひてそしる。

譏 先方のおちどをとがめそしる。

ソ

注 つぎこむ。ながしこむ。

酒 水を庭などにうつること。

瀉 どつと一時にそゝぐ。「一瀉千里」

滂 水をながしこむ。

ソグ

灌 田地などに水を引くこと。「灌漑」

漑 物の數々をのこさず支度すること。そなへものにする

ソナ

備 供

フ

具 「供養」

ソフ

添 數のますこと。

沿 つきてゆくこと。岸に沿ひて。

ソム

胥 うしろむきになる

クム

叛 離叛す。うらがへる。

（タ）

タハフ

貯 入用だけをかこひおく。

蓄 すこしづつよせあつめておく。

タスク

助 力をそへる。

輔・佐・弼 臣が君をたすくるなどに多く用ふ。

扶 手をひきて、こけぬやうにたすけるもとでをやる。

賞 用方ひろし。

タツ

立 坐より身を起して立つ。「起立」

起 建 家を建つ。國を建つ。

タト

假・令 假定する意。

譬 假へば類似せることを假に作り設けて

ヒ

喩 話すこと。

例 例へば 譬と同義。

示 例へば類例をあげて示す。

ムシノタ

娛 樂 苦の對。心おもしろし。

賴 なぐさむ。憂を散ずる。たよりにする。「依賴」

ムノタ

負 たよりにする。心だよりにする。

恃 父なくば何をか恃まん。うしろだよりにする。我が能を負む

尊 卑の對。

貴 賤の對。位の高きこと。

フタ

尙 大切にすること。上品なりとすること。

ブトフタ

崇 あがめうやまふ。

倒 のけざまにたふること。「轉倒」

ルフタ

斃 うちたふれて死ぬること。斃れて後に已む。

仆 べつたりと横になる。

賜 下し與ふる意。波行四段は働きかけ良行四段は受身。

給 あてがふこと。又敬語に用ふ。

フマタ

會 をりよく行き合はせること。

マタマ

偶 思ひよらず。ふと有りたること。

（チ）

チカフ

誓 言葉にてちがはぬやうに約束すること。

盟 牲を殺し血をすゝりて神にちかふこと。

（ツ）

ルドサカツ

掌 其の持分をとりあつかふこと。

司 支配すること。

使 指圖すること。波行四段活用。目上の人に用事をつとむること。波行下二段。主人に奉公すること。波行下二段。

事

フカツ

仕

突 つきあてる「突擊」

タ

衝 正面につきあてる

撞 うちあてる。「鐘を撞く」

搗 「餅を搗く」白にて米などをつく。

ク

春

ツ

附 依なり。近なり。添へつけること。「附屬」

クツ

就 從ひ近づく「去就」直にそれになる。「位に即く」

即

繼 絕えたるをつぐ。あとをつぐ「繼承」

嗣 家をつぐこと。

續 次第に。つぎつぎ斷の對。つゞく。

ツグ

接 つぎあふ。「木を接ぐ」

蓋 有りたけをきはめつくす。「力を盡す」「心を盡す」盡と同義。

ツクヅ

竭 無くし盡すにはあらず。一々殘らず人を盡く殺すなり

悉 の義。

殘 こしらへ爲す。「文を作る」こしらへ建てる。

ツクル

造 「家を造る」

作

ツ

謹 一筋に念を入れる「言を謹む」

ムシヘツ

慣 內はにして用心する。「獨を慣む」

勤 骨折り。精出すこと。力を專にするなり精力を一途に、其の事に用ふる義にて、日夜朝暮のわざとする意あり。しひてつとむ。力を入れて精だす常住にしてかはることなき義。

ツムト

務

ツ

勉 力を入れて精だす常住にしてかはることなき義。

ツネ

恆 永久にかはることなき義。

常 毎にいつも。其のたびごとに。しとぐる意あり。

ツネニ

遂 とう〳〵。

終 窮極なり。始の反對にて「しじゆう」の意あり。はては略の反對にて、くはしきこと。とくと念を入れ、たしかにすること

ツヒマ

詳 略の反對にて、くはしきこと。

ツカラ

審 たしかにすること

ツラナル

連 つゞくこと。

列 ならぶこと。

（ト）

ト

說 四段活用。そのわけを言ひきかす。

解 四段活用。下二段活用。ほどく。わかるやうにする。刀で牛をほふるやうにときわける。

ク

釋 下地のすがたなきやうにする。四段

溶 下二段。「渙然として氷釋く」水にとける。加行下二段。佐行四段

所 場所、又は方角。其の所を得たり。市役所。

ロコト

處 場所に用ふる時と接續詞に用ふる時とあり。「住處」「致し候處」

調 よく和合する。「調和」正しくそろへる。「整理」

整 偏頗なく、出入なく

齊

く、平等に。正しく、一様にそろへること。

ト

止（トマル）　動かさぬこと。やめさせる。とめる。

留（トマル）　去に對す。その場にとゞめおく。

停　中止なり。そのばにしばらくとゞむること。

問　物事を問ひたづれる。「問答」

訪　往きて人をおとづれること。

訊　とひたゞす。

通（トホル）　塞の對。とほりぬける。「貫通」

徹（トホル）　底までとほる。「徹底」「貫徹」

透　すきとほる。

取　とりて我が物にする。捨の對。

探　ひろひとる。「探集」「探用」

執　固くとりてはなさず。とり行ふ。とり守る。

操　正しくとりまもる。「志操」

把　にぎる。「鉞の柄を把る」とりて、もとでにする。

資

（十）

ナ

長（シガナ）　短の反對。形にも時にも用ふ。

永　時のながきにのみ用ふ。

鳴　鳥獸のなくこと。悲鳴にも和鳴にも用ふ。「鳴禽」又ナルと訓む。

啼　聲をあげてなく。かなしむ意あり。「啼鳥」

泣　涙をながし聲をたてずしてなく。「血泣」

哭　涙をながし聲をあげて深く悲しみなく。

爲　しようと思うて。つとめてすること成るに至る道すぢ。

成　出來あがる。爲すの結果。

猶（ホナ）　舊に依るの意。まだ。やはり。

尙　其の上に加ふる意あり。つけ加へて幾遍となく重ねてならひ熟すること。「學習」

習（フラナ）　まねをすること。「模倣」

倣　馴　鳥獸の人になれなつくこと。

狎　禮を失ふほどになれなれしくなること。

慣　しなれること。「習慣」「慣用」

（二）

ヤナ

難（ムヤナ）　難儀千萬なること。

惱　しなやむ。行きなやむ。

思　思ひわづらふ。

北（ニグ）　敵にうしろを見すること。「敗北」

亡　のがれ、さること。

逃　ノガルとも訓む。避け隱るゝ。

惡（ニグ）　好むの對。甚しくいやになる。

憎　愛の對。小づらにくく思ふ。

疾（ムク）　れたましく思ふ。

俄　急に。突然に。

（又）

ニ

遠（ニカハ）　あわたゞしく。あわてゝそぐ。

驟　物の急に來るなり。「雨驟に至る」

似（ニル）　類似の點がある。

肖　骨相が似る。

煮（ニル）　調味してにるなり。「魚を煮る」

煎　につめること。「藥を煎る」「茶を煎る」

拔（ヌク）　ぬきゝだす。「拔群」「選拔」

抽　引きぬく。鐵を抽く。「抽象」

挺　自らぬけ出づる。「身を挺して進む」

擢　同じもの中よりぬきいだす「拔擢」

脫（ヌク）　ぬけてはだかになる。蟬、殼を脫く。

盜（ヌス）　人の物をとる。

竊　人目をしのび、こつそりとする。ヒソカにと訓む。

偸（ムス）　すきをねらひて。

（ノ）

ノ

遺（ノコル）　遺物。遺言。もれのこる。物の失せること。わすれる。

貽　後世子孫にのこす。「謀を子孫に貽す」

殘　あましのこす。「殘餘」あれのこる意ともなる。

臨（ゾノ）　高きより見下す。

望　其場にのぞむ。「淵に臨む」「光臨」

述　高きをのぞみ、遠きをのぞむ。又、人心の希望。

陳　のべあらはす。一々ならべたてて言ふ。

宣　あまねくあらはしひろむる意。宣言ひろげのべる。

演　「人望」「人望」のべあらはす。

（ネ）

ネ

眠（ネムル）　目をとぢてねむること。

睡　ぬれむりすること。かすめとる。

伸（ノバス）　屈の對。屈せるものを直からしむ。

延　のびて長くなる。ひきのばして長くする。「蔓延」のびのびとして通る。

舒　卷きたるものをのぶる。

暢　ひらきのべる。「親暢」

展　升・昇　降の對。すゝみのぼる。天に昇る。昇と略ゝ同じ。階をのぼり、官にのぼるに用ふ。

陞　ものの上にのぼる「登山」

登　下なるものが上になる意より轉じて「のる」ともいふ。

上　湯水などをのむ。轉じて氣を飲み聲を飲むなど用ふ。丸のみにする。

飲（ムノ）　車・船・馬・輿などにのる。馬にのる。

呑（ムノ）

乘（ルノ）

騎

（八）

ハ

計　物の數をかぞふること。物のつもりをたつること。「總計」「計畫」「設計」思慮する。相談する。

謀　「ます」にてはかる分量をみつもる。

量　水の深さをはかる義より種々に轉用す。「測量」「推測」

測　尺度にてはかる義はかるとよめば計量などの意。はかりごとよめば謀略の義。「雄圖」「後圖」

度　議事の宜しきを評定すること。

圖　そとへ出す。舌を吐く。胸襟を吐露す。

議　逆吐して食下らざるなり。

吐（ハク）　主として事の起點に用ふ。てはじめ時にも用ふることあり。

始（ハジメ）

嘔（ハク）

（ヒ）

ハ

初　主として時のうへに言ふ「最初」「當初」

創・剏　新たになしはじむること。

肇　開き始むること。「國を肇む」

恥　心にはづかしく思ふ。

辱　榮の對。ハヅカシメと訓む。外聞惡しきをいふ。カタジケナシと訓むときは全く意義を異にす。

愧　己の見苦しきを、人に對してはづるなり。

慚　愧と同じ。「慚愧」

羞　はぢてまばゆく、顏の合せがたきなり。婦女子などのはづかしげにするなどに多く用ふ。

赧・怍　はぢて赤面すること。

放　四放へぱつとやるゆくまゝにまかせてやる。

縱　矢を發つ。砲を發つ。晩の對。

發

ハ

早　すばやきこと。

捷　速　遲の對。

拂　拂子にてはらふやうに、ぱつぱつとはらふ。災を除き、福を求むる意。

祓　推しのけてやる。「攘夷」

攘　勢あつて、ひつぱる。

張　はりつける。

貼

（ヒ）

ヒ

引　弓をひく義より轉じて廣く用ふ。引きのべる。引きよせる。引きさげる。引きいだす。引きずること。「杖を曳く」「尾を曳く」。つなをつけて、ひきゆく「牛を牽く」

曳

牽　力を入れて引く。

挽　延　引きて、こなたへまねく。

ヒ

低（シク）　高の對。廣く用ふ。

卑　尊の對。主に位のひくきに用ふ。

窮　しのびやかに。人目をぬすみて。

私（ソヒ）　公の對。ないしようで。

陰（ニカ）　陽の對。かげにて水にひそむといふ。

潛　字なれば深隱の義を兼ぬ。

均（シトヒ）　平に高低なく、等分なること。

等　等級などのひとしきなり。同と殆ど同じ。

齊　とゝのひそろふ義

開（クラヒ）　閉の對。

啓　ものの口をあける義より轉じて、人の知らぬことをしへ、みちびく義

拓　地をひらく「開拓」

披　雨方へ分けひらく「胸襟を披く」「封を披く」

排　手にて推しのける「排斥」「廣狹の對。

博（ヒロシ）
博聞。博愛。博學
はゞひろし。
弘　ひろむる意あり。弘く世に行はる。
汎　深入りをせず。ばつとしてひろきこと。
寛　ゆつたりと餘裕あること。
潤　兩方に限りありて共間のはゞびろきこと。「眼界潤し」

（フ）

含（クフム）
口中にくゝみてをる。廣く用ふ。
銜　口にくはへる。「枚を銜む」
臥（スフ）
横になる。面を地につけて。うつぶしになる。
伏　仰の對。うつむく。
俯　あらかじめ用心すること。「豫防」
防（フセグ）
ふせつけぬ。「拒絶」
拒　さしあたりて。ふせぎとめる。「敵を禦ぐ」
禦
履　ふみゆく。
踐　ふまへてをる。

（ム）

陷　足拍子をとり。どしどしふみつける「舞蹈」
踏　ふみつける。約を踏むは約束をふみ破るなり。約を履むは約束をふみ行ふこと。
躪　人のあとをふむ。後より追ひかける今に對す。

（ヘ）

故（シルフ）
古
舊　新に對す。「故舊」
奮　勇みすゝむ。
震　電にて震動する。轉じて威光に畏るにも用ふ。
振　ぶる〳〵とふるふふるひおこるにも用ふ。
揮　物を手にもちて、ふるふこと。「揮毫」
戰　がたがたと、體や手のふるふこと。おのゝく。

（ツ）

隔（ヘダテ）
間に物を入れること。
阻（ソバダ）
邪魔になる。

（ホ）

誇（コホル）
大言するなり。自を賢とするなり
矜（ホコル）
わるきことを氣ままにすること。
恣（シホマイ）
專なり。一人にてほしいまゝにするなり。寵を擅にするは、わがみばかり寵をうける。「名を擅にす」
擅（マイ）
大概、大略の義。細かに推し尋ねずまづざつと。あらあら。
略（ホゞ）
貶の反。ほめすゝめる。
褒
毀の反。ほめすゝすばかりにほめるほまれともよむ。
譽
賞（ホム）
罰の反。物を褒美にやる意。
一しきりづつなく「鷄鳴狗吠」「犬吠ゆ」
吠（ホユ）
勢よく聲をあげる「虎吼ゆ」
吼（ホユ）

（マ）

將（サマニ）
將に……ならんとす。既の反對。
當　當に……なるべし。さうなるの當然の理である。
方　さしあたつて。
交　入りくむ。入りまじはる。
雜　純の反。色々の物の入りこみたること。
錯　物の入りちがうてまじはること。
混（ハジルマ）
清・別々の物が一つにうちまじる。人數の中にあづかり加はる。參政。
參
又（タマ）
別にまた。そのうへまた。
亦　モマタとよむ。これもあれもといふ義。
復　ふたゝび。かさねて。
待（ツマ）
來るをまつ。又來ればあしらひをする意あり。まちうける。
俟　いそがずに、自然とそこへ來るまで

全（シタツマ）
完　まつ。「俟」も同じ多くのものが、のこることなくそろふ意。「大全」一つのものが、かけなくそなはること。「完璧」
祭（ルツマ）
祀　儀をとゝのへて神に事ふること。神としあがめる。
守　みはる。とりまもりて行ふ。大切にすること。とりまきまもる。
護（ルモマ）
衛

（ミ）

妄（ミダリ）
虚妄。かろ〳〵しく。
猥　なれなれしく。煩雜の義。
濫　むやみに。まぎれこむ意あり。濫用自身に。
自（ラカツミ）
身にかけて僞す。
躬　したしく手をくだす。
親　目にふるゝこと。開に對す。
見　心をとゞめて見る
視

こと。「熟視」「視察」
觀　心をとゞめてくはしくみること。見物の義ともなる。
覽　一通り目をとほすこと。
看　手をかざしみる。又久しく見守る義あり。「看病」
瞻　仰ぎみる。
瞰　俯してみる。

（ム）

向　背の對。まむきにむきあふ。波行四段。自動詞。來るを出でむかふること。送の對。波行下二段。他動詞。
迎
邀　要の字と音義通ず待ちうけて迎ふるなり。波行下二段他動詞。
報　恩に報い、怨に報ゆ。かへしこたふるなり。杯を反すなり。轉じて返答に用ふ。
酬

（メ）

惠　物をやる。施し與へる。
邱・恤　合力する貧を賑はしめぐむなり
巡　視まはること。
繞　山岳圍繞。
旋　きりきりまはる。「旋風」「周旋」
周　すみからすみまでめぐる。
回　ぐるりぐるりとまはる。「周回」
環　とりかこむ。
運　轉り動くなり。「運行」
召（スメ）
ふびよせる。議員を召集す。
徵　威勢を以て召す。「豫備兵を徵集す」

（モ）

最（モツトモ）
衆中の第一。
尤　めだつ。すぐれて異なるをいふ。はなはだ。
玩・翫（モテアソビナグサム）
もてあそびなぐさむ。

（ヤ）

弄（ソブ）
なぶりものにする
本（モト）
末の對。根本。元始。物事のはじまり。「元日」
元
素（モト）
どだい。したぢ。
固　勿論。
求（モトム）
乞ふなり。ほしがりもとむ。
索　さがしもとむること。
需　なくてはならぬものを、まちもとむる。「需用」
者（モノ）
多く、人を指していふ時に用ふ。此者に御渡し下され
物　度」形體ある物品。
安（ヤスシ）
危の對。「安樂」
寧　やすらかに、おちつく。
康　息災安樂なること
易　難の反。たやすし
破（ヤブル）
わる。さく。くだく。
敗　成又は勝の反。

（ユ）

疾（ヤマヒ）
急にやみつくこと
病　重き病。疾よりも重し。
疫　流行病。
痼　持病。
行（ユク）
止の對。あるき進むこと。
往　來の對。さきへゆく。
逝　ゆきて歸らず。「逝去」
讓（ユズル）
我を後にして人を先にす。
禪　天子位をゆづりわたし給ふこと。
赦（ユルス）
罪過をゆるす。なだめゆるす。見のがす。
宥　先方の望をきゝ入れる。
聽　それにてよしとゆるす。
許　よしとみとめてゆるす。うけがふ。
允　ゆるしてまぬがれしむる。
免

（ヨ）

善　惡の對。
好（ヨシ）
醜惡の對。形のよきこと。好なり。
佳　美なり。「風景佳し」
良　善なり。賢なり。
吉　凶の對。めでたきこと。
因（ヨル）
この原因によりてそれにつきて。
由　經過の意。「此の來歷に由りて」
據　物のよりどころとする。
依　よりそひてはなれぬこと。
顧　たのみとしてよること。
憑　もたれかゝる。「几に憑る」
寄　たよりてつく。
藉　たよりて力にする
喜（ヨロコブ）
悲・憂・怒の對。
悅　中心によろこぶ

（ワ）

分（ワカル）
合の反。分離。
別　彼は彼、此は此と區別して混ぜぬや

カ　ル
訣　うにする。死別。ワカルとのみよむ。
頒　ワカツとのみよむ分ち賜ふなり。

ワ　ク
涌　水の、下よりわきいづること。
沸　湯のわきかへること。

ワ　ザハヒ
禍　禍の對。思ひ設けぬ不幸。
殃　神のとがめをうけること。
災　天變地異のわざはひ。

ワ　スル
忘　心に記憶せぬこと。
遺　心にとりおとすこと。

ワ　タ　ル
渡　水をわたる。
亙　物の此方より彼方にまでとどきわたること。
渉　かちわたりすること。

ワ　ラ　ヒ
笑　をかしきことありて、閉ぢたる口を開くこと。
嗤　あざけりわらふ。
哂　にやりとわらふ。微笑と同じ。

ワ　レ
我　彼に對す。
吾　對する字なし。

（ヲ）

チ　カ　ス
犯　法外なることをする「罪を犯す」
冒　かぶせかける「姓を冒す」向ふさきみずにやる「冒險」
侵　人知れず、いつとなく、のりこむ。「侵略」

チ　サ　ム
治（ヲサメル）　物の無理にならぬやうにする。おちつかせる。
理　すぢみちをたてる。
修　あしき所をつくろひて、おひおひになほすこと。
收　とり入れること。
納　をさめ入れる。
攻　研究する意「專攻」

チ　シ　フ
教　言語を以て教ふるにも、方法を以て教ふるにも廣く用ふ。
訓・誨　ねんごろに言ひきかせてをしふること。

チ　シ　ム
惜　捨てがたく思ふ。
吝・嗇　しわきこと。

チ　ハ　ル
終（ヲフ）　初に對す。窮なり極なり。盡なり。終へてしまふ。「卒業」
卒　皆なり。盡なり。
畢　畢竟なり。「畢生」決なり。すむこと。らちのあくこと。「結了」「完了」
了

——（終）——

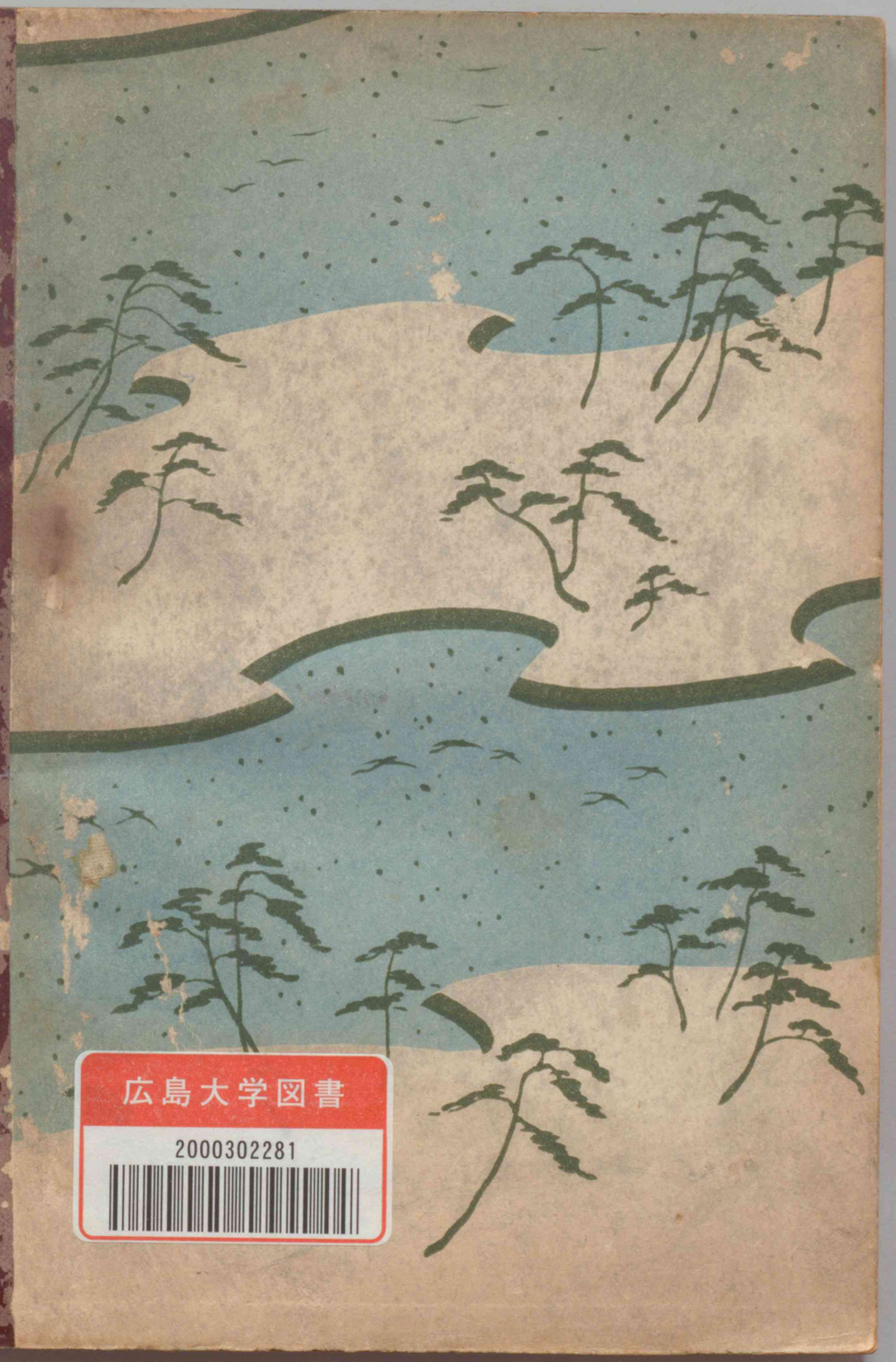
昭和十二年七月二十日　初版印刷
昭和十二年七月二十三日　初版發行
昭和十三年一月二十二日　訂正再版印刷
昭和十三年一月二十五日　訂正再版發行
昭和十六年八月五日　訂正三版印刷
昭和十六年八月十日　訂正三版發行

女子國文新編（四年制）全八册奥附
自卷一　至卷八
定價　各金五十八錢

著作者　垣内松三
發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　代表者　山本慶治
印刷者　東京市本郷區眞砂町三十六番地　亀谷良一（東東二二六）
發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）文學垣内女國

日本出版配給株式會社　元給配
東京市神田淡路町二ノ九



広島大学図書
2000302281